

座談会 片岡美智さん（京都外国語大学名誉教授）

大崎正二さん（元大倉商事ロンドン・パリ支店長、翻訳家）に聞く

ドイツ占領下(1940～1944年)のフランス

聞き手 野口 謙一

菅野 賢治

2001年6月28日

東京都立大学 国際交流会館 1 F 大会議室にて

菅野——今日は、大変蒸し暑いなか、多数お集まりいただきありがとうございます。片岡美智さん、大崎正二さんをお招きして、お二人にうかがう「ドイツ占領下のフランス」という主旨で座談会を始めます。

まず、今日の座談会を開催するにいたった経緯をご説明いたします。今年度、私は、この都立大仏文専攻の学部の授業で「ドイツ占領下のフランス文学」という講義名を掲げ、4月から、十五名ほどの学生の皆さんと勉強をはじめたところでした。講義をはじめるとあって、ナチス・ドイツ占領時代のフランスについて、決して多いとは言えない日本語参考文献の一つとして、大崎正二さんのお書きになった『パリ、戦時下の風景』を非常に重要な書物として紹介したわけです。大崎さんのこのご著書は、八年ほど前、1993年に西田書店から刊行されたものですが、私は94年にフランス留学から帰ってきて、この本を見つけ、「やはり日本にも戦時下のパリを体験なさった方々がいらして、こういう手記を書いておられるのだ」と大変興味深く読んでおりました。そして、いつか著者ご本人にお会いして直接お話をうかがうことができれば…とっておりました。

この春、授業開始にあたって、この本を受講生の皆さんに紹介しながら、「著者の大崎正二さんという方に会ってお話をうかがうことができればどんなにいいでしょうね」と述べたところ、今、片岡さんの隣に座っておられる、今年、学士入学で仏文に入って来られた野口謙一さんが、授業のあとで「よろしかったら大崎さんと連絡をつけて差し上げます」とおっしゃるんですね。私はまずびっく

りいたしました。ついで、なぜ野口さんが大崎さんのことをご存じなのか、お尋ねして、二度びっくりいたしました。それは、戦時中のパリで大崎さんとお知り合いになった片岡美智さんから、「大崎さんに会いたかったら電話をしてみたら？」と言われたからだ、とおっしゃるんです。私は驚きに驚きが重なって、しばらく自分の耳が信じられないほどでした。片岡美智さんといえば、著書『シモーヌ・ヴェイユ——真理への献身』のなかで、ヴェイユとユダヤの関係という、フランスのヴェイユ研究者たちも口を濁してなかなか語りにくそうにしている非常に微妙な問題について、ご自身の戦時体験にもとづいた実にストレートな指摘をなさっている方として以前から存じ上げておりました。片岡さん——本当は、われわれ若輩のフランス研究者からすれば大先生に当たる方なのですが、今日は「片岡先生」ではなく、あえて「片岡さん」で通させていただきますが……

片岡——どうぞ、どうぞ。

菅野——こうして私にとりましては、片岡さんも、大崎さんと並んで、いつかドイツ占領下のフランスについて直接お話をうかがえたらどんなにいいだろう、と思っていた方だったわけです。

そのお二人と野口さんを介して一度に連絡が取れることになった、その驚きといたらありませんでした。さっそく、これは何か企画しなければならない、ぜひお二人で都立大にお越しいただいて、お話をうかがう機会を作らねばならない、ということで、急遽、お二人に電話を差し上げたのが5月の半ば頃でした。突然の電話による不躰なお願いも二つ返事で引き受けてくださり、今日、都心からこのような遠隔地まで足をお運びくださったお二人に、まずはあらためて心から感謝申し上げます。また、野口さんが、私のような未熟者の授業に出てやろうかという「むら気」を起こさなければ、今日の機会は歴史から永遠に失われていたかもしれない、大袈裟な言い方をすれば、二十世紀から二十一世紀に、何か大切なものが伝わらずに終わっていたかもしれないわけですし、野口さんにも、あわせて深く感謝申し上げねばなりません。

まずは、野口さんの方から片岡さんをご紹介いただきたいと思います。

野口——本日は、こうした企画のお手伝いことができましたことを、大変嬉しく思っております。私は片岡先生の教え子でございまして、片岡先生をご紹介するのは一番身近な人がいいのではないかと、ということで、私が片岡先生のご紹介をさ



座談会風景（向かって左から、野口謙一さん、片岡美智さん、大崎正二さん、菅野賢治）

せていただくことになりました。片岡先生のご経歴につきましては、お手元にお持ちの資料〔補足資料参照〕で公式的なところはわかりかと思いますが、私はそれを補足するかたちで、片岡先生のエピソードといえますか、裏話のようなものをお話させていただきます。

片岡先生がお生まれになったのは福井市——これはお父様のお仕事の関係でして——ですが、小さい頃からほとんど東京でお過ごしになりました。先生のお祖父様は、当時、高知県選出の帝国議会の代議士、片岡健吉であられまして、明治7年から10年まで四期にわたって衆議院議長をつとめ、のちに同志社大学の学長に就任なさった方です。片岡先生は、東京の女子学院から東京女子大学の哲学科を卒業されたあと、法政大学がはじめて女子に入学を認めた年に法政大の仏文科にお入りになりまして、昭和14年に卒業されました。そして、その年の6月にはじめて女子に応募が許されたフランス政府招聘給費留学生試験に合格なされて、12月に渡仏されました。以後、昭和27年（1952年）に日本にお帰りになるまで、12年にわたってフランス政府から留学費の給付をお受けになりました。

フランス留学時代の先生は、勉強一筋の生活を送られたようです。のちに帰国されることとなったのは——本当のところ日本には帰りたくなかったようですが——南山大学からの強い要請によるものでした。南山大学で五年間お勤めになったあと、仏文科科長を最後に退職なさいまして、東京に戻り、法政大学教養学部の教授をなさいました。そのほか、帰国された昭和27年1月から51年1月まで、二十四年間にわたって東京日仏学院の講師もなさいました。日仏学院の講師におなりになったいきさつにも、また味わい深い話があります。たまたま日本にお帰

りになる船の中、のちに日仏学院の院長になられました方のお母様——その時、ちょうど日本への船旅の途中だったわけですが——とお知り合いになり、船上で「息子の学院で教えてもらえないか」と頼まれ、日本に着くや否や、日仏学院で教えることになったのだそうです。南山大学でお仕事に就かれたわけですから、名古屋から東京にトンボ帰りで通っていらしたそうです。

私が片岡先生にフランス語を教わりましたのは、昭和30年代の後半のことです。法政大学には、戦前、仏文科があったのですが、戦後、廃止になっておりました。片岡先生は、教養学部の教授としてフランス語を教えていらっしゃいました。私は、教養学部のあと、フランス語中級というクラスがありまして——今の都立大でいいますと「選択フランス語」に当たるものでしょうか——、そこではじめて先生に教わり、卒業後も何年間か聴講させていただきました。教わっていた当時、私は「こわい先生だ」という印象をもっておりました。「こわい」といっても特に何かをうるさく言われるわけではないのですが、何か、先生が教室に入れますと、ピンと張りつめた空気が教室に行き渡りまして、緊張した雰囲気を感じておりました。そうかといって、先生はなにかうるさいことをおっしゃるわけではなく、学生には大変人気があり、スナップ写真を一緒に写したり、気軽に食事を共にしたりしておられました。当時、教養学部で先生に教わったクラスは、今でも何年かに一回同窓会を開いて、必ず先生をお招きしているようです。

先生は、昭和45年4月から平成2年3月まで、京都外国語大学の客員教授として、毎週新幹線で京都へ通われました。そのスケジュールは金曜日の朝、東京を発って、金曜日、土曜日と二日にわたって京都でフランス語をお教えになって、定宿の京都ホテルに二泊されて、お帰りの際には関西方面の神社仏閣をあまねく訪れてから東京にお帰りになっていたそうです。その加減かどうか、先生も少しは柔らかな感じがしてきたように感じられます。

先生にとって、一番思い出深い出来事は、先生がよくお話になっておられましたように、昭和32年、東京で開催された、アジアではじめての国際ペンクラブで通訳をなさったことと、それから、昭和41年、サルトルとポーヴォワールが日本を訪れた時に、関西に同行なさって通訳をおつとめになり、夜、料亭で焼き焼きをつつきながら、お二人と懇談されたことだそうです。

先生は、学生に教えることと、ご自身で勉強されることが本当にお好きな方で、

いつも私には、「健康で勉強できることは幸せなことですよ。いくら歳をとっても、勉強していれば頭は衰えることはありませんよ。進歩しますよ」とおっしゃっていますが、なかなか私はそういうわけにはいかないようです。今でも、ほとんど一日、フランス語の勉強と、何時間かの放送大学の放送を欠かさないようです。ちなみに、先生のお宅には古いラジオが一台あるだけで、テレビはありませんし、新聞もとっていらっしやらないようです。

以上、思いつくまま、粗雑なお話になってしまいましたが、片岡先生のご紹介を終わります。

菅野——続いて、私の方から、簡単に大崎正二さんをご紹介します。

大崎正二さんは、1913年（大正2年）、福岡県にお生まれになりました。東京外国語大学フランス語部で、フランス語を学ばれました。当時、外語大には、われわれ都立大の仏文科の草分けでもいらっしやったモンテーニュの関根秀雄先生、フランス人教師としてはノエル・ヌエット先生がいらっしやったそうです。1935年（昭和10年）、二十二歳で大倉商事に入社し、二年後の1937年、二十四歳の若さでパリ支店に配属されます。そして1937、1938年、戦前のパリ——大崎さん自身、一番いい時代だったと著書のなかで振り返っていらっしやる戦前のパリ——を体験なさったあと、第二次大戦が勃発。1940年6月、破竹の勢いでドイツ軍がフランスに攻め入り、パリはあっという間に占領されてしまいます。大崎さんは、会社のフランス人社員らと一緒に、一時、南西部のポルドーに避難しますが、その後、安全が一応確保されたとしてパリに戻り、ドイツ占領期をつうじて大倉商事のパリ支店を一人で切り盛りします。今日は、主にそこから4年間のドイツ占領期のお話をお聞かせ願えたら、と思っております。

1944年、連合軍のフランス上陸にともない、大崎さんはベルリン支店に移り、ベルリン南西のマルスドルフ城でヨーロッパ在住日本人約120名と籠城生活を送ります。1945年、シベリア鉄道で満州を經由して帰国。戦後、ロンドン支店、ふたたびパリ支店勤務を経て1971年に大倉商事を退職されました。著書として、冒頭にご紹介したように、戦前、戦中のパリを描く『パリ、戦時下の風景』がありますし、その続編ともいえるべき、1944年、45年、ドイツでの籠城生活を描いた「マルスドルフ城の日々」「雑木林のなかで」という連載記事を『彷徨月刊』に発表なさっています。お手元の「文献目録」[補足資料参照]に載せておきま

したとおり、現在、さらにその続編もお書きになっていて、かなりまとまった量の原稿を私も見せていただいております。また、大崎さんは翻訳書も多数手がけておられまして、モーパッサン『運命の女』『短編集』、スタンダール『赤と黒』——この大崎訳の『赤と黒』を、今回、インターネットを駆使して全国の古書店のカタログを血眼で探してみたのですが、残念ながらまだ見つかっておりません——、さらにはプロスペル・メリメの『タマンゴ』と『賭博』、『思想は世界を結ぶ——クーデンホーフ・カレルギ自叙伝』（上・下）、『キュリー夫人伝』などをお訳しになっています。

さて、お二人の紹介が済んだところで、さっそくドイツ占領下のフランスについてお話をうかがいたいと思います。皆さんのお手元の年譜〔補足資料参照〕に沿って、代わる代わる私の方で用意した質問に答えていただき、後半、時間はたっぷりあってありますので、短い休憩を挟んで会場からの自由な質問という形式をとりたいと思います。

まず、片岡さん、1939年（昭和14年）に、日本人女性としてはじめてフランス政府給費留学生試験に合格した頃のことを簡単にお話いただけますか？

片岡——どういう点でお聞きになりたいですか（笑）。ね、いろいろありますけれど、とにかく、この年にはじめてフランス政府給費留学試験に女性も応募してよろしい、という許可が出たんですね。はじめてですよ。当時、英語の方は英学塾があったりしてね、割合に広く日本女性に勉強の機会があったんですけれども、フランス文学の方面ではまだまだ勉強の機会は稀でした。たまたま法政大学の仏文科に豊島与志雄という小説家がおられて——ユゴーの『レ・ミゼラブル』もお訳し



になった方ですけど——、その方が仏文科のジャン・ラボルド号の甲板にて科長さんでいらして、1934年の春、女子の入（1939年12月か1940年1月）

学も認めましょう、ということになさったんですね。その時点で私はすでに東京女子大の哲学科を出ておりましたが、男の人は予科一年、本科四年で、たしか全部で五年だったと思いますけれども、私は女子大を出ているからということで本科に入れたのだったと思います。当時、東京大学でも、たしか英文科以外に女子の入学は許可されなかったと思いますが、珍しいことに、法政大学の豊島与志雄先生が女子の入学希望者を募りましょう、ということにしてくださったんです。その時、私もいいあんばいに受け入れて頂きましてね、簡単な面接だけで法政の仏文科というところに入れたんです。そして、今度はちょうど法政大を卒業というところで、フランスの外務省がフランスへの給費留学試験への応募を今年から女子にも許可しましょう、という年に巡り合わせて、それで私はフランスに留学することができるようになったわけです。それはまだ1939年のことですから船で行きました。神戸港からマルセイユまで、しかもフランスの船ですから、途中、サイゴンよりもっと北の方まで行って、人々をたくさん労働者代わりに乗せてくるとかで、四十日間ぐらいかかるのが普通だったんですね。ところが、いざ切符をもらっても——ちょっとこここのところ長くなりますが、あなたたちご存じないでしょうから、おしゃべりしちゃいますと——、切符をもらったまではいいものの、出発が中止になっちゃうわけです。戦争がその年の9月に始まってしまったのでね。それで、残念だけれどアテネ・フランセへ通ってフランス語を続けておりました。このことを覚えておいてください。つまり、第一次大戦の時は、ドイツ兵が、ばたばたと北の方からフランスへ入って来たんですね。そこで、今度はマジノ線というのを作って、フランス軍はそこに一生懸命待機したんです。ドイツ兵はいつ来るか、いつ来るか、と思って。ところが、ヒトラーのドイツ軍はポーランドの方へ行っちゃったもんですから、それでフランスはちょっと一安心して、外務省でも、「生死は保証しないけれども、途中で事故があって死んでもよろしいなら船は出しましょう」ということになったんです。私は、死んだって構わない、日本なんていたくない、といっただけで行くことに決めました。詳しい事情はお話ししませんけど、麹町の警察署で、「おまえのような女は死んだほうがお国のためだぞ」なんて警官から怒鳴られたこともあったぐらいなのでね。こんな日本に誰がいるもんかって思っていましたから、大喜びで船に乗り込んだんです。死んでもよろしいなら乗せましょう、ジャン・ラ・ボルド号を出すことは出

すけれども無事に地中海を渡れるかどうかはわかりませんよ、という話だったんですけど、とにかく私は乗っかって行ったんですね。もちろん乗客なんてほとんどいませんよ。まあ、そんな話は別として、とにかくマルセイユへ着くことができました。それで……、マルセイユに着いた時はどんなだったか話してくれ、ということでしたかしら。

菅野——マルセイユに到着する前にですね、まだ片岡さんが日本にいらして、「一体いつになったら出発できるんだろうか」と思いながら、毎日のようにお聴きになっていたというレコードがありました。

片岡——ああ、ジャン・コクトーの、ええ、ええ。

菅野——片岡さんが『人間この複雑なもの』という本の中にお書きになっていることです。ちょっと引用してみます。「ベルト・ボヴィーがレコードに吹き込んでいるコクトーの『声』(la Voix humaine) に毎夜聞き入りながら……」

片岡——たしかに、毎日毎日聞いてました。

菅野——「……ああ一体いつになったらこれが直かに聞けるのだろうと、つく溜息も深まった十二月の初め」——つまり1939年の12月の初めですね——

片岡——ええ、そして40年の1月にやっと……

菅野——「……突如フランス大使館から呼び出し受けた。」(『人間この複雑なもの』129頁)

同じコクトーの『声』でも、新しい録音はいろいろとあるようなんですけれども、当時、片岡さんがお聴きになっていたベルト・ボヴィーによるLP版のレコードはないものか、とあちこち探し回りましたところ、日仏学院のメディアテックのご協力によりそれを見つけることができました……。

片岡——あら、では、ぜひ聴かせてくださいな。

菅野——ええ、ぜひ聴いてみたいと思います。初めの部分だけ、原文と訳をプリントにしておきました。

Allô, allô, allô..... Mais, non, madame, nous sommes plusieurs sur la ligne, raccrochez..... Allô..... Vous êtes avec une abonnée..... Oh ! allô!..... Mais, madame, raccrochez vous-même..... Allô, mademoiselle, allô..... Laissez-nous..... Mais, non, ce n'est pas le docteur Schmit..... Zéro huit, pas zéro sept..... allô !... c'est ridicule..... On me

demande ; je ne sais pas. (*Elle raccroche, la main sur le récepteur. On sonne.*)...
Allô !... Mais, madame, que voulez-vous que j'y fasse ?..... Vous êtes très
désagréable..... Comment, ma faute..... pas du tout..... pas du tout..... Allô !
..... allô, [...]

Jean Cocteau, *La Voix humaine*, 1930

もしもし、もしもし、もしもし……………いえ、違います。混線ですわ、かけ直してください……………もしもし……………こちらは交換手じゃございません……………まあ、よくそんな！……………もしもし！……………とんでもない、そちらのほうこそ切ってください……………もしもし、交換手さん、もしもし……………もう邪魔しないでくださいな……………違いますよ、シュミット医院じゃありません……………08ですわ、07じゃなく……………もしもし！……………どうもおかしいわ……………向うからかかってきてるんですよ、こちらにはわからないわ。（電話を切るが、片手は受話器においたまま。電話のベルが鳴る）……………もしもし！……………まあ、また。いったいどうすればいいんですの……………ずいぶんと感じのわるい方ね……………なんてこと、こちらのせいですって……………とんでもない……………そんなばかなこと……………もしもし！……………もしもし、[後略]

(ジャン・コクトー『声』、一羽昌子訳)

1930年2月17日、コメディール・フランセーズにて初演

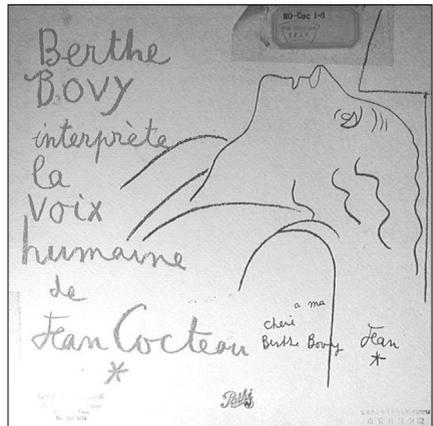
Berthe Bovy による一人芝居

菅野——いかがでしょうか。これですか？

片岡——ええ、ええ。今、言っていた、この「アロー、アロー」というのね。

菅野——当時は、今のようにカセットテープなどというものもありませんし、音としてのフランス語を一人で勉強するためには、やはりレコードを回すしかなかったのですか？

片岡——ええ、レコードですよ。



ジャン・コクトー『声』（LP版、ベルト・ボヴィーによる録音）

菅野——しかも、教材用に作られたレコードというものも少なかったでしょうね。

片岡——さあ。私は、これを家で聴いてましたね。

菅野——お恥ずかしながら、私は今回はじめてこの作品の録音を聴きまして、たしかに混線とか交換手といった状況は古びてしまっても、「あなたは不快な人である」といった例文を含めてフランス語の発話の勉強にはうってつけだと思いました。同時に、初演が1930年とはいえ、この混線ぶりといい、対話しているつもりで結局独話になってしまうシチュエーションといい、まさに1939年、「欧州情勢は不可解なり」という名台詞に代表される世界の混乱を反映しているようで、非常に面白いと思ったわけです。

さて、片岡さんが40年1月にマルセルユに到着なさる前に、一足先にフランスに行ってらした大崎さんのお話をうかがっておきましょう。大崎さんが、東京外国語大学のフランス語部を卒業されて、大倉商事に就職なさったのが1935年ですね。そして37年にパリ支店に配属が決まった。当時のいきさつや、37年、38年頃のパリの様子などをお話いただけますか。

大崎——私は二十二歳で社会に出たのですが、面くらいましたね。第一次大戦後の世界経済の大恐慌は、日本にも深刻な影響を与えていました。さらに、大変な気候不順つづきのために、農産物は不作。農村の若い娘さんたちは遊廓に売られていく有様でした。今から七十年前の日本に、本当にそうしたことがあったんです。その頃の日本は、明日にも革命が起きそうな険悪な社会でした。今日の日本も不景気だといわれますが、あのような状況は、おそらく皆さんは想像もつかないだろうと思います。

大学を出ても就職できない。その頃、仏文なんか出た者は、みな遊んでたんです。そういう不況から、40年、第二次大戦に突入するんですよ。戦前の不況が戦争の遠い原因になっていたわけです。当時、学校を出ても勤めるところがなく、大学出が生命保険の勧誘に歩き回る有様で、松竹が『大学は出たけれど』という映画を制作したものでした。高等遊民という言葉が生まれ、それはロシア革命の前夜のような恐ろしい世情でした。実際に、共産主義が猛烈な嵐を巻き起こしていました。作家の小林多喜二が警察の拷問で殺されたとか、少し前には大杉栄が

尼崎で一家惨殺されたなんてこともあった。こうした混乱の中で、日本は一步一步と戦争への道を進んでいたのです。今日の日本は平和そのもので、みな平和ボケしているようですけども、お互いに警戒したいものですね。

さて、私は学生時代から文学を思慕していました。学校を出る頃にはシムノンの探偵小説を『新青年』の新年号に全訳したり、改造社のフロバール全集の月報に、はからずも辰巳豊さん、亀井勝一郎さんといった大家と並んで私の「シニスム」という小さな評論が掲載されて、生まれてはじめて原稿料を稼ぎました。この時は、原稿料の計算が面倒だったか、あるいは単に間違えたんでしょう、大家と同率の原稿料をもらって、たまげてしまったことも覚えています。今から思えばまことに冷や汗ものなのですが、その当時は、機会があれば文筆を業としたいと、ひそかに甘い考えをあたためていたものです。

そんな時、頭に雷が落ちたような事件が起きました。大倉商事に入社して二年目でした。パリ支店に勤務を命じられたんです。今思うと何とも信じがたいような話ですが、その時、私は重役に向かって即座に「嫌です」と言ったんです。重役がどんなに偉いか知らないが、人が右に行きたいと思うのに、何の権限があって左に向けようとするのかと、私は内心ぶつぶつと納まりません。どうです、若者の純心さは大したものでしょう。

その頃、一般にフランスへ行くということは手の届かぬ夢のまた夢でした。萩原朔太郎が「フランスに行きたしと思へどもフランスはあまりに遠し」と誦ったほどでしてね。私は会社の費用でもってフランスに行けるというのに即座に断ったんです。重役は驚きましたよ。不心得者だといって、ひどく叱られました。「わが社には君みたいに早く海外支店勤務になった前例はないというのに、何を言ってるんだ」と、さんざんしぼられましたよ。ところが、「私は文学を志しているのです」なんて言おうものなら、「明日から入社に及ばず」という時代でしたものね。日本がいかにも自由のない曲がった社会であったか、おわかりでしょう。

フランスへ行くのが嫌な私は悶々の日々を送っていました。そんな時、同じフランス語のクラスの二十人ほどが卒業後はじめて銀座のおでん屋に集まったんです。「大崎君、顔色悪いぞ、何か心配事でもあるのか」と聞かれるものだから、「実はこういうわけでパリ駐在を命じられたんだよ」と答えた。私としては本当

に行きたくないもんだから、青い顔をしてね、きっと病人みたいだったんでしょ。そして、ふと顔を上げると、何とも羨ましそうな目つきで皆が私を見ているではありませんか。おや、これはよほどいいことがあるらしいと、やっとその時フランス行きの決心がつかしました。人間の運とはまったく不思議なものですな。

急ぐ旅行でしたから、陸路シベリア経由でした。モスクワまで、かれこれ二週間ぐらいですかね。当時は共産主義国、スターリンの時代ですから、二週間というものの車窓のカーテンを開けることが禁じられていました。二週間、真暗なカーテンの中で、毎晩、何百匹という南京虫にさんざん苦しめられて、やっとポーランドの国境を越えてヨーロッパに入った時の、あの輝かしい自由の喜びは忘れられません。

ところで、パリに着きますと、これがまた驚きでした。フランスという国のなんと不思議な自由な空気です。日本からやって来た私には信じられない別世界でした。魔法の空気の中に毎日浸っているような、不思議な感じがしましたね。皆さんは、今、自由な気持ちでいるでしょうけど、当時のフランスと現在の日本を比べても、昔のパリの方がはるかに自由でした。

フランスでの勤めは、とにかく愉快でしたな。あの当時、パリ支店には日本人が私をいれて六人でした。その中で私が最年少なのですが、どういうわけか支店長に見込まれて、会社を代表するサイン権を持っているのは支店長と私の二人だけでした。年齢も学歴も私より上の人たちがずらりといるのに、サイン権を握っているのは支店長と私だけです。私はわが身の変わりようにはただただ驚くばかりでした。しかし、私は十八、十九歳の時に人生に懐疑を抱き、徹底的なニヒリズムを通過した末に、人間の宿命的な愚かさを自分に重ねて悟っていましたので、滑稽な空威張りをせずに節度のある姿勢を崩しませんでした。

なぜ私のような若輩にサイン権が委ねられたかという、単に私がフランス語をやったからなんです。ほかはみな英語系統の人々で、フランス語の書面が読めないわけです。ところが、私自身、フランス語をやった、東京外語を出たというものの、授業に出ずに学校の図書館で小説ばかり読んでいた報いで、全然フランス語がわかりません。最初の頃は、聞くも駄目、喋るのも駄目、読むのも駄目です。これには手の打ちようがない。一応、入る手紙は全部私が見て、内容をみんなに伝えて、夕方、会社でできた手紙には私がサインしなければならないことになっていたんです。ところが読んでも分からない。そこで、そのまま引き出し

の中に入れっぱなしにしているとね、電話がかかってきて「こういう書類が届いただろう」といわれるけれども、ほかの人々は「ない」「もらってない」と答えるしかない。私がない時に、みんなが私の引き出しを開けてみたら、見つからなかった書類が山になって出てくる、という始末でしてね。

それでも、日経ち、パリ生活に慣れてくると、なんと自分がまるでバルザックの小説の中の人物のように、自由気ままに動いているではありませんか。しめた！と思いましたね。文学をしているという感じです。そして、わかったことが一つありました。それは、日本で文学をやるといっても——もちろん当時は川端康成だとか横光利一だとか中川洋一とかがいました——、しかし、それは文壇文学であって本当の文学じゃない、ということでした。日本の純文学と称するものが本当の文学ではないように思われてきたのです。それは日本特有の文壇文学で、社会性に乏しい、大人の文学ではないと気がついた。これは一つの開眼でした。そこで、日本にいる文学志望の友人に手紙を送り、「今は汗水流して仕事に打ち込み、苦勞したまえ。そのなかから自然に文学が生まれてくるのだ。急いで文壇文学の無駄花を咲かせるな」と言ってやったものでした。

菅野——その実に伸びやかなパリの空気の中、**39年9月**にドイツのポーランド侵攻、英仏による対独宣戦布告という事態を迎えます。しかし、一般に「奇妙な戦争」と呼ばれるように、開戦から九か月間は独仏間に実際の戦闘は行われぬ。この時期、**40年1月**、片岡さんはジャン・ラポルド号の船上で新年を迎えた、ということになりますね。

片岡——長いあいだかかりましたよ。

菅野——**1940年1月**のマルセイユ、パリは、どんな様子でしたか。

片岡——想像してください。真っ暗です。灯りといっても、あそこにあるような非常出口の緑色の灯りのようなものじゃなくて、暗い青の裸電球だけでね。もうフランス全土、ことにパリなんか真っ暗で、青い小さな電球が、ところどころ暗く点っているだけでした。

パリに着いて、私は、リュクサンブール公園の前にある、ミス・ワトソンというアメリカ系の方が経営している女子寮に入ることになるんですけど、その廊下にも小さな青い電球があるだけで、パリ全体が真っ暗でした。すでに船の上でも、煙草さえ吸ってはいけないと言われていたんです。煙草一本の火がちかっと

灯っただけで、あそこにフランス人がいる、フランスの何かがあると分かって攻撃されてしまう。神戸を出てマルセイユ着くまで、船で四十日以上かかったと思います。しかも、乗客として乗ってるのはほとんど誰もいないんですよ。船底には、インドシナの北の方から連れてこられた人々が大量詰め込まれていたようですが、客室の方には誰もいませんでした。それで、船の上ではのんびりして、海軍の士官のような方とたまに甲板で会うとちょっとおしゃべりする程度でしたね。

そして、マルセイユは真っ暗、パリも真っ暗です。想像できますか？ 転ばないようにと、わずかに青い電球のちっちゃな球がどこかについてるだけ。そういうマルセイユであり、パリでしたね。

菅野——40年の6月、ドイツ軍侵攻の時のことをお話いただけますか。

片岡——私、根っからの物好きなんでしょうね。日本政府としては在欧邦人には帰国してほしいわけで、実際、都合のついた人はみんな日本にお帰りになっちゃうんですけど、わずかながらパリに残る人々もおりました。ドイツ軍が攻めて来たとなった時に、そういう人たちは、パリのあちらこちらに住んでないで日本大使館に集まりなさい、と命じられたんです。日本の大使館は、エトワールという——皆さんご存じでしょ、凱旋門の近くのね——あの広場に近い、いい場所にあります。そうして、大使館に預けられる格好となったわけですけど、ドイツ軍が入って来た日、私、こっそり抜け出してちょっとうろついてみたんです。その頃のパリを想像してください。フランス人は田舎のどこかに必ずヴァカンス用の場所があるんですね。みんな、そこに行ってしまった後なので、パリの街はひっそり。ほとんど誰も住んでないみたいにもぬけの殻になってしまうんですけど、そんな時、私、ちょろちょろっと大使館から出てエトワール広場の方へ行ってみたんです。

最近、占領下のパリの本など見ると、若い将校みたいなのが軍服を着て整然と凱旋門から入ってくる写真が出ています。でも、あんなものじゃないんです。私が直に見たものを皆さんも体で感じながら、今、凱旋門のところにいると思ってください。今日のように、青空のこんな晴れた日じゃありませんでした。夏でも晴天が少ないパリのことで、どんよりと曇ったような一日でした。その時に、どんな風にドイツ兵が入ってきたと思いますか？ フランス人が、みんなどこか田舎に行っちゃったあとのパリに。1870年の普仏戦争の時にドイツ軍はとても悪い

評判をフランスに残したんですね。だからドイツ兵ってのは残虐だっというので、みんな恐れて……。

それに、まず、これを覚えておいてくださいね。英語を上手く発音できませんけれども **Paris is burning?** っていうんですよ。これは44年、ドイツ軍が撤退する頃の話ですけど、「パリは燃えているか」といってヒトラーがベルリンの方から問いただすわけですね。そうすると司令官は、「今、燃えてます」って嘘を答えたんだったと思います。その司令官はパリを焼かなかったんです。「焼きなさい」って言われて、「燃えてるか」って聞かれてるのに、焼かなかったのね。

それで、ドイツ軍のパリ入城の話ですね。その入城というのは、今、写真に出ているような、立派な軍服を着て、意気揚々と入ってくるんじゃないで——私が直で見たのを感じて下さいね——、みんな若い、二十歳そこそこの青年ですよ、それがね、もうくったくに疲れ果てているんです。それで眼なんか開いてませんよ。もう眠くて眠くて、睡眠不足がずっとたまってたんでしょ。ですから、こんなになって、馬から落っこちそうになりそうなのが、それでもなんとか馬につかまってね。その馬も、もうひよろひよろなのが、ぞろぞろぞろぞろと、少しずつ少しずつ凱旋門のところから入ってきたんです。それを私は、もうちいちゃくなって眺めてましてね。本当にかわいそうと思いましたよ。軍服は着てるけど、学生のようなもんですよ。しかも何日も眠らないんだからもうくったくに疲れ果てて、眠りこけて、うとうとうとうと、ここがパリだなんて思っていないような様子で入ってきました。それが延々と続いてましたよ。そういう風にして入ってきたんですよ。写真のように、あんな勢いよく入って来たのではないのです。

菅野——ありがとうございます。かたや大崎さんの方は、ご自分だけではなくて会社を守る義務もおありになったわけですね。会社のスタッフと一緒にボルドーに避難された時の様子をお話いただけませんか。

大崎——さて、どんな具合にお話したらいいものか。とにかく、ドイツ軍がパリから五十キロぐらい離れたところまで来ても、空襲があっても、普通わからないんですね。翌朝、朝刊を見て、「ああ、うちの近所に爆弾を落としたんだな」ということがようやくわかる、といった具合です。たとえば、私のアパルトマンからさほど遠くないところに空軍省があります。その建物が空爆を受けました。また、その少し先のシトロエンの自動車工場が爆撃されました。しかし、そばに

住んでいながら何もわかっていないような、そんな不思議な状況でした。人々も一向に騒ぎ立てないのですね。生活は静かな川の流れのように、いつもと少しも変わらない。会社は、オペラ座とマドレーヌのあいだぐらいのところ、目抜き通りにありました。ちょうどパリの中心部ですね。街に出て、コーヒーでも飲もうかという時は、カピュシーヌ街（*rue des capucines*）という、私にいわせるとパリで一番美しい通りに行っていました。その通りのプラタナスの並木が木陰をつくってしましてね。季節は6月です。道行く人々は悠々と平和を楽しんでいた。ドイツ軍が入る一週間か、十日ぐらい前にですよ。そして、オペラ広場の「カフェ・ド・ラ・ペ」のテラスは、新聞を片手の紳士たち、きれいな帽子を被った女性たちで、いつも席がないほどの混みようです。実に平和でした。ドイツ軍のパリ入城の十日前、まだまだ悠然たるものだったのです。

この余裕はどこから出てくるかというのと、やはりマジノ線なんですね。フランス国民は、仏独国境に構築されたマジノ線に絶対の信頼を置いていました。この巨大な要塞に守られたフランスの戦勝を疑う者は一人としていなかったでしょう。私もフランス人も、皆が大丈夫だと思っていた。ところが、実際に戦争になってみると、ベルギー国境あたりのマジノ線に穴が開いていた。なぜかというのと、戦前、レオン・ブルム内閣、人民戦線というのがありましたが、東部防衛のための予算がとれても、あまり熱心にマジノ線の補強をやらなかった。結局は、恐ろしいことに国民の安心感が裏切られていたわけですね。予算を確保しておいて、こっそりポケットの中に入れてたりした政治家がいたかどうかはわかりませんが、そういうわけで、ドイツ軍は迂回してそのベルギー国境の穴から侵入し、セヌ川の下流を渡ると一瀉千里にパリへ進軍したのです。

政府は、「われわれはパリを死守する。パリ市民よ、パリにとどまり、職場を守れ」と連日繰り返し呼びかけておりました。ところが、私の会社のそばのコンコルド広場に面して建っている海軍省の建物を、実際にリヴォリ街の入口の方から眺めてみますと、軍用トラックが何台も並んでいて、大きなカートンボックスをどんどん積み込んでいる。案の定、政府が一番先に逃げ出しましたね。「市民よ、パリにとどまれ」などと連呼する裏で、浮き足だって逃げ出し支度をやっているのが政府だったのです。

1940年6月10日の朝、異様に空が暗いので、咄嗟に小指を鼻に入れてみると、

指先が真っ黒になる。それでパリ全市が煙幕で覆われているのに気づきました。ボルドーへの避難を開始したのは、その二日後です。東京本社には電報で動静を知らせておいて、朝十時に会社を出ました。さて、パリから逃げるといっても、朝の十時に会社を出て、車が南のポルト・ドルレアンを抜け出したのは正午過ぎでした。それからの国道は、ベルギーや北フランスからの避難民を加えた人間の大洪水で、八列の縦隊は南へ南へとただただ押し流されているという様子でした。時速は三キロ。つりかごのようなものを頭の上ののっけて歩いて避難していく女の人の人を見たとする。「あの人、さっき見たな」と思いながら追い越して、それからしばらく行くと、またその女の人が先を歩いているんです。パリから三十キロ南のアルパジョンに着いた時には夜の九時を回っていました。ボルドーまでは六百キロ。これはほぼ東京＝大阪間の距離ではないでしょうかね。朝一番に出ても、最初のうちは一日に六十キロしか進めなかった。途中の池で魚釣りなどして遊びながら、やっと十日目にボルドーに着いてみると、もうドイツ兵が街を散歩していましたよ。

ベタン元帥が国家の元首となっていました。そして、1870年から七十年間続いた第三共和国は幕を閉じていました。パリから政府について来ていた同盟通信の井上勇さんが「フランス敗れたり！」と言って涙を流したという話を、日本人仲間のあいだでの噂として聞いたことがありましたが、それはヒトラーに蹂躪された自由主義の敗北に対する苦い涙なのだな、と私は思ったことでした。

菅野——大崎さんは、その後、ボルドーにしばらく滞在されて、しばらく情勢をうかがっていらした。

大崎——というよりも、パリに帰れなかったのですよ。ドイツ軍



フランス人社員らとボルドーに待機中の大崎さん（1940年夏）

の占領行政がうまく滑り出せば、問題なくパリに帰れそうなものですが、それがそうはいかないのですね。パリの当時の人口を五百万人としますと、おそらく四百万人がどこか地方に脱出していたでしょう。その四百万人が戻るといっても、第一に車のガソリンがない。次に、四百万人分の食料が供給できないのですよ。ガソリンも食糧もドイツ軍に押さえられていたわけですからね。ドイツ軍が、バターであろうがパンであろうが、トラックに積んでみなドイツに持って帰るんですから。パリへ戻ってもいい、との許可を取りつけるまで、やはり三、四か月はかかりましたね。これにも割り当てがありまして、許可を得た人から、ぼつぼつとパリへ帰るわけです。

菅野——片岡さんは、しばらく大使館にいらしたんですか。

片岡——ええ、しばらくね。それで、その後すぐ、もとの女子寮に戻ったと思います。

菅野——わかりました。さて、一言で説明するというのは非常に難しいと思うのですが、占領前と占領下のフランス、占領前のパリと占領下のパリでは、どこがどう変わったのか、ということの説明をしたら、どういうことになるでしょうか。われわれが、今日、本や写真をたよりになんとかして思い描こうとしても、なかなか想像するのが難しい、この占領下のパリの雰囲気を一言で言い表すとしたら……。

片岡——ドイツ軍がいた頃のパリ？ 平和でしたね。私はね、さっきも申し上げたように、誰かあの学生なんだけども軍服着てるようなドイツの青年と、いっぺん腕を組んで歩くなんてのをやってみたらよかった、と今になって思うんですけどね（笑）。

それでね、ちょっと申し上げると、パリ市のはずれに大学都市があって、日本館とか、アメリカ館とかがありますね。あそこはね、ドイツの若い兵士たちが住宅がわりに占拠していた場所だったんです。なぜそんなことを私が生々しく知っているかというと、ドイツが敗退してね、引き上げて行ってしまいますね。その時、私はなにかのグループと一緒に日本館に行きましたら、そのドイツ兵たちが逃げる前に捨てていったドイツの軍服があったわけですよ。台所やら物置やらに脱ぎ捨てられてあった、その軍服を、私たちは抱えて持って帰って、そしてどうしたと思います？ なぜ、そんなもの持って帰ったと思いますか。物資がとても

不足していたものですから、私たちはね、それを黒く染めたんですよ。ドイツ兵が置いていったドイツの軍服を。それを黒く染めて、縫い直して、スカートや上着に作り替えて着ていた時代があったんです。これは懐かしく、といいますか何といいますか、思い出しますね。ですから、ドイツ兵とそんなに華々しく喧嘩だとか残虐なことがあったようには思いませんね。ただ、ここでちょっと口滑らせますと、パリが解放されるとパリからドイツ兵がいなくなりますね。その時は、ちょっとパリの街中でチャンチャンバラバラがあったんですよ。その悲しい話を私が身近に聞いたのは……。

菅野——その話は、もう少しあとでお願いします。

片岡——あとでね、はい。

菅野——まだ占領が始まったばかりですので……。

片岡——そうですね、はいはい。

菅野——もう少し占領初期に踏みとどまりたいのですが、実は、大崎さんに、占領期のパリを彷彿とさせるような音楽は何かありませんか、とあらかじめお尋ねしたところ、それは「*Il ne faut pas briser un rêve*」（「夢を破ってはいけません」）というシャンソンである、とのお答えが返ってまいりました。調べてみますと、これは1936年にジャン・サブロンという歌手が歌い、戦前から戦中にかけて大ヒットした曲のようです。大崎さんはレコードを持っていらっしやいましたが、それは戦後の吹き込みで、今日は、何とかして、当時、大崎さんが聞いていらした音を、と思ひまして、おそらくオリジナルであろうと思われるものを探し出してまいりました。それを、ぜひここで聴いてみたいと思います。

Il ne faut pas briser un rêve

夢を破ってはいけません

作詞・作曲 Jean Jal 歌 Jean Sablon 1936年

Depuis le jour où je vous aime,
Mon cœur est sans espoir...
Malgré votre sourire même,
Tout est las, triste et noir...
Pourtant un jour, dans un baiser...
Vous m'avez promis de m'aimer...

あなたに恋した日から
わたしの心に望みはありません
いくらあなたが微笑んでも
すべて気だるく、悲しく、暗鬱として
それでも、ある日、口づけとともに
あなたは愛を約束してくれた

Il ne faut pas briser un rêve
Même s'il vous semble un peu fou,
Tâchez donc que le mien s'achève,
Puisqu'il est plein de vous...

夢を破ってはいけません
ちょっと気狂いじみたようにみえる夢でも
わたしの夢がかなうように努めてみせて
あなたで一杯の夢ですもの

Déjà,
En vous serrant dans mes bras,
Je sens
Que votre étreinte me ment...
Il ne faut pas briser un rêve,
Même s'il vous semble un peu fou,
Tâchez donc que le mien s'achève,
Puisqu'il est plein de vous...

すでに
あなたを抱きしめながら
感じる
そのきつい抱擁も嘘だと
夢を破ってはいけません
ちょっと気狂いじみたようにみえる夢でも
わたしの夢がかなうように努めてみせて
あなたで一杯の夢ですもの

菅野——シャンソンとドイツ占領期とといいますと、私はどうしてもパトリック・モディアノのことを考えてしまいます。自分が生きたわけでもない、父親の時代としての占領期を執拗なまでに文学の対象とし続けているモディアノも、作品のところどころに実に効果的に当時のシャンソンの歌詞を滑り込ませ、いわゆる言い難い同時代性の雰囲気醸し出すことに成功しております。モディアノが好んで取り上げる歌も、この「夢を破ってはいけません」のように、一見何でもない恋の歌でして、政治、占領といったものにはまったく関係のないものばかりなのですが、内容が時代に関係ないものであればあるほど、やはりあの時代にしか歌われ得なかったもののように聞こえてくるのが不思議です。

大崎さん、今、この曲お聞きになっていかがですか。

大崎——いや、これは参ったな。私事ですけれど、いいでしょう。楽しく懺悔いたしましょう。私は当時二十五、六歳でした。日本出発の時に決められた一五〇〇フランの給料が、パリでは瞬く間に三五〇〇フランになっていました。それというのは、先輩たちが解決できなかった十五年来の懸案のある特殊な仕事を——スパイではありませんよ（笑）——毎夜十二時まで一年半かけて、ついに私がやってのけたからなんです。それが認められたのですね。本社のその部門の重役からも感謝状をもらったものでした。その結果、給料が二倍以上に跳ね上がった。だから遊びにもよく行った。ふところにお金はうなっていましたからね（笑）。

いや、これは冗談、冗談ですよ。

モンパルナスのエドガール・キネ街に「モノークル」——片眼鏡という意味ですね——という名のキャバレーがあったんです。そこにクロードという可愛い小柄な女がいました。彼女の張りのある発音のフランス語が、まるで舞台女優のように美しく、私は彼女が好きになりましたね。

ある夜、彼女をめぐってフランス人と張り合ったことがありました。クロードはそのしつこい男が嫌いだったのです。その男の見ている前で、彼女が私のふところに飛び込んで来て、猛烈にかりそめのペーゼ——なんですか、接吻ですか——の雨を浴びせました。三十分も続いたような気がしました。そうすることで、その嫌な男を追い払ったことがあるんです。そのキャバレーには二十日に一度ぐらい通ったものです。でもそれは、このシャンソンのようにかなわぬ何とかでしたね。

夏の季節ですと、朝の四時前には小窓が白み、外で雀がいっせいに囀りはじめます。すると、部屋の奥から「*Il ne faut pas briser un rêve...*」とシャンソニエールのかすれた声が聞こえてくるのです。ああ朝になったのだな、と客も女たちもいっせいに立ち上がると、今度は皆が手をつないで、大きな輪になって、アルフォンス・ドーデの *L'Arlésienne*、『アルルの女』、ビゼーの歌劇の最後の場面のファランドールを踊りはじめるのですよ。それで散会。めいめいが朝の薄靄のなかに散って行くというわけです。家にどうやって帰ったものか、私もすっかり酔っているもんだから、朝起きてみたら家のアパートマンの天井が見えて、あれ、ゆうべどうやって帰ったっけ、などという調子で……。

その頃の歌ですね。懐かしくて、ついおのろけになってしまい失礼しました。



菅野——当時の「色男」「ブリュニエ」にて会社関係者らと（戦前の写真、左一番手前が大崎さん）

せていただきましたが、それを見ますと、今のお話なども非常にリアリティーがありまして……。

大崎——それはちゃんとした写真ですからね。変な写真じゃないですよ（笑）。

菅野——ところで、いつのことか日付ははっきりしないんですけども、この頃、片岡さんと大崎さんは一度、オデオン広場のカフェでお会いになっている。

大崎——（片岡さんに向かって、おどけて）はじめまして。

菅野——片岡さんの『人間この複雑なもの』から、ちょっとその場面を引用してみましよう。

全力を挙げてフランス語を習得中の私にとって、日本語で話してばかりいることは、まことに不利であった。それに日本人同士のつき合いにはダニのような執拗さがあり、誰がこう言った、彼がああ言ったと耳にするだけで、既に過敏になっている私の神経は苛立たずにはいなかった。[中略]

私は人の世が煩わしくなった。

「どこかに、平安が支配してるような場所はないものだろうか？……あつたら、そこへ行ってしまいたい！」こうした心境を、私はその頃、次のような事情で二度ほど会った日本人の青年に打ち明けた。どこかの社員とだけは覚えているが、名も顔も全然記憶に甦らないこの早熟な青年に、私は自分の生涯にとって大切な二つのことを負っている。

その一つは、私が最も親しくしたフランス人の一人であるビュオー氏（東洋学者で、一昨年夫人とともにパリでガス自殺をされた）を識るきっかけをこの未知の青年がつくってくれたこと。もう一つは、オデオン座の付近のカフェで対談中、私が今述べたような感慨を洩らした時に、彼が言ってくれた言葉、「そりゃ駄目ですよ、いくら環境を変えてみたって。自分自身が強くなるより仕方がない」

当時の私に似た気持ちを抱えている今日の若い女性に遭遇する毎に、私はこの言葉以上の答えを与えることが出来ない。（『人間この複雑なもの』151-152頁）

このように片岡さんは書いていらっしゃる。この「名も顔も全然記憶に甦らない早熟な青年」と、今、片岡さんは並んで座っていらっしゃるわけですが。

片岡——その方が大崎さんと分かったのが最近だから不思議ね。

大崎——それは、あんたが物覚えが悪いからなんだ。あの時は、あんたの方から私のビュローに電話があった。それまで遠くから見かけたことがある程度で、一度も口をきいたことのない片岡さんからの電話。いったい何の用だろう。ただ

「相談があるから、会って欲しい」のだという。「相談」というのもおかしいな、ひょっとしたら彼女は私が好きになったのかもしれない。そこでオデオン座の近くのカフェでランデヴー。勘違いだったんですけどね。会って、「何ですか」って言っても、いつまでも「あなたを好きです」とは言わないんだ。そして彼女がやっと口にした言葉は……。 (片岡さんに向かって) これ、話していいかな？

片岡——ええ、私、覚えてないから。

大崎——いや、やはりやめにしよう。それで片岡さんが言うには、ある人に意地悪をされて、逃げ場がなく、もう疲れ果てた。ひとこと言うと、向こうから三倍にも四倍にもなって言い返してくる。喰いついたらどこまでもしつっこく放さない。どうしたらいいでしょう、助けてください、と言うんです。それで、「その相手は日本人ですね」、「そうです」、「女ですね」、「そうです」。「名前は？」、「名前は言えません」。

「ああそう」と言いながら、私には大体見当がついていたんです。そんなにあくの強い女はざらにいるものではない。「それでは僕がこれから言うことを、そのまま書き取ってください」と言って文面を書き取らせた。三下り半、つまり離縁状ですね。「あんたはこれをポストに投函したら、次に大使館や何かのパーティーで顔を合わせても、絶対に口をきいてはなりませんよ。そっぽを向いていなさい。向こうから手紙が来ても、それに返事をしてはなりませんよ。開封せずに、ぼいっと屑かごに捨てるのですよ。出来ますか」と尋ねると、「出来る」という返事です。「では、これに切手を貼って出さない」といって別れました。その後、われわれはフランスでは再会することなく五十年の歳月が流れました。そういえば、あの頃、「あの二人はおかしくないか。まったく話をしないじゃないか」と一度だけ小耳に挟んだことがありましたね。

戦争末期に、私はパリからベルリンに移りました。ドイツが降伏した後、ソ連軍の網にかかったドイツ各地からの日本人とともに、私はモスクワから満州里へ送還されましたが、そのシベリア鉄道の汽車の中で、その片岡さんの難物にばったり出会って、やあ！と声をかけたことがありました。その女性は今はもうこの世を去りました。そっとしておいてあげましょう。

私は、この『パリ、戦時下の風景』を出版した時、片岡さんに一部送りたいと思いました。ところが、私のチルチル美智はどここの空を飛んでいるやら、住所不

明でした。そこで…………。

菅野——片岡さんのほうでこの本をお読みになって…………。

片岡——はい。

菅野——あの時の青年が大崎さんだった、と知ったのは、この本を読みながらのことだったのですか。

片岡——それは…………。

大崎——そうではないよね。あんたに一冊あげたでしょ。あげたけど…………

片岡——ええ。

大崎——私が本をあげた時には、そんな本が私を書いたことも知らなかったはず。連絡がとれるようになったきっかけというのは、こうなんです。それまで、東京女子大出身の人に「名簿を見て頂戴、片岡美智っているだろうか」と尋ねても、「いませんね」という返事で、どうしても見つからなかった。そんなある日、家内が、母校の女子学院の卒業生名簿を見ていて、偶然に「片岡美智」の名を発見したんです。「おや、三田にいるって」と、すぐ電話をしました。「覚えている？」と尋ねると、あんまり、その…………。

片岡——でも、よく私の名前を覚えてらしたわね。私の方では、あなたの名前を全然覚えていなかったの。

大崎——いくら「大崎です」といっても、全然覚えていないんだから。

片岡——不思議ねえ。

菅野——なるほど、そういういきさつだったんですか。よくわかりました。

片岡——ほんと、不思議ですよ。

菅野——それ以降、片岡さんは留学生として、大崎さんは第一線の商社マンとして、まったく別々の占領期を体験していくことになるわけですが、それぞれに思い出深いエピソードをお話しいただこうと思います。まず片岡さんから。

片岡——はい。

菅野——片岡さんが『シモーヌ・ヴェイユ』の中でご自身の戦時フランス体験を語っておられる部分、一番衝撃的なエピソードは、やはりユダヤ人排斥の現実に目撃者として立ち会った、ということではないかと私は思います。ナチス支配下に置かれた国や地域ならばどこでも実施されていた政策で、われわれも本、写真、その他の資料によって見知っているつもりなんです、やはりその現実に

立ち会った方の体験談に触れると、背筋が凍るような思いを禁じ得ません。『シモーヌ・ヴェイユ』から一節を引用してみます。

四二年に入り独軍のソヴェト攻略の雲行きがあやしくなっていくにつれてユダヤ人迫害は激烈の度合を増し、ドイツ国民及び独軍占領地域の人民の不満、不信の目をそらせるためにヒトラーはあることを思いついた。学年末試験も近づいた五月二十九日の朝、いつものように登校したわたしの目に異様なものが入ったのだ。それはパリ大学内のフランス語教員養成校の教室内の出来事で、クラス一番の成績保持者ドレフュス嬢が着ているいつもの紺のスーツの左胸にわたしをどきっとさせ、目をそむけさせるものが附いていたのだ。それは見るも不愉快な大きなものだった。（直径一〇センチあまりの星形の徽章で毒々しい黄色が黒い太い線でふちどられ“ユダヤ人”と黒でべったり書かれたもの。）放課後街頭でわたしはこの忌まわしい徽章が道ゆく多くの人の子供から老人までのそれぞれの胸についているのを見た。これが、民衆の憎悪の視線をその一点に注がせるために考案された〈ダビデの星〉と呼ばれるものであったのだ。これこそまさにユダヤ人にとって奴隷の烙印に等しいものであった。この徽章を、シモーヌ・ヴェイユは自分の左胸につけることなく——恐らくは見ることもさえず——終わったと思う。彼女はこれの実施のちょうど二週間前五月十四日にマルセイユ港を両親と一しょに離れたのだから。

（『シモーヌ・ヴェイユ——真理への献身』179-180頁）

片岡さんにとっても、この体験が戦時期でもっとも印象深い、といひましょか、衝撃的なエピソードの一つであると思うのですが、今、私が読んだところと重複してもまったくかまいませんので、お話していただけたらと思います。

片岡——やっぱりね、このユダヤ人の問題っていうのは、わたしたち日本人——つまりヨーロッパ人にとっての外国人ですよ——にはわからないと思うんです。たとえば、私がパリにおりました時代、どこかの中年の男の方と知り合いになりますよね。たとえば講演会かなんかに行ってご一緒したりして、つまり、インテリ階級ですね。しばらくして、その方とまた偶然道で会った時に、どなたか連れの方がいらして、そのお連れの方を私に紹介するとなれば、当然、その方の名前をおっしゃるでしょ。それで「アンシャンテ」といって握手して別れますね。そして、またその次に会った時に、その男の方はこうおっしゃいます。「このあいだ、あの人をあなたに紹介したけど、あの方はね、ユダヤ人の名前だけどユダヤ人じゃないから、心配ないですよ」ってね。そういうふうに分明するん

です。自分がユダヤ人とはつきあってない、ということをお私のような小娘、日本人の女子学生にさえも言うんですよ。その頃の人々は、そのくらい自分がユダヤ人とつきあってるっていうことを、なんといいですか、汚点のように、罪のように、そういうふうには自覚して



ましたよ。私にそういうことをおっしゃるのは、

パリの中堅どころ、いわゆる知識階級に属している方々でした。私に誰かを紹介して下さる時に、そういうことをおっしゃるんですね。その中年の男の方も、いろんな世界にお知り合いのある立派な方だったんですよ。現在のフランスで、ユダヤ人をどういう風に思っているのか、よくわかりませんが、

ですから、私が本に書いた「ドレフェス嬢」というのも、ダヴィッドさん、ジャコブさんと同じ、ユダヤ人の名前なんですね。ジャコブ嬢といって、ソルボンヌ大学時代にとっても親しくしていた女性の言語学者がいらして、その方のお父さんは、なんでもアフリカ探検家で、政界でも有名な方だったらしいのですが、その娘さんと私は親しくしておりました。ダヴィッド、ジャコブ、それからアロンという名前もありますよね。レーモン・アロンという思想家がいるでしょ。とってもすばらしい評論家で、私、大好きだったんですけど。それから、皆さん、シュテファン・ツヴァイクという人の翻訳がたくさん出ていますけれどね、読んだことがあります？ 読んだ方、ちょっと手を挙げてみて。私も翻訳で一時期愛読してたんんですけど、ツヴァイクがユダヤ人だったということを私が知ったのはかなり最近のことでした。ツヴァイクは、ユダヤ人迫害が激しくなった時にドイツを出てアメリカに行くわけね。たいていはアメリカに逃れるんです。アメリカはユダヤ人でも受け入れてくれると思ってね。しかも、アメリカでも南の方です。この

ツヴァイクのことで本当にもう胸が痛くなってしまったのはね、若い娘さんと自殺を遂げるんですよね。まあ、ちょっとそこはいかにも男の人というか、一人で自殺するのも寂しかったんでしょうかね（笑）。その若い娘さんがユダヤ人だったかどうかわかりませんが、二人でアメリカをどんどん南の方に下って行って、ついには自殺しちゃうんです。ユダヤ人迫害が厳しくなってきた、ドイツにいられなくなって、アメリカに避難してね、それで南に下って……。

そういう話を読むと、たとえば私がオギャーって生まれた時に、望もうが望ままいがもうユダヤ人になっている、というのがどういうことか、考えてしまいますね。フランスならフランスのどこで生まれようと、そういうふうになるわけですからね。

ドレフュス嬢のことに話を戻しますとね、それはもう頭のいい人で、私から見ると、もうすごいなあとしか言いようのない女子学生だったんですけど、彼女の胸に、ある日、大きな——このくらい大きいものですよ——黄色の星が二つ重なってこうなって、**JUIF** と大きく黒で書かれたものがついているんです。その日から、小さな子供も腰の曲がったおばあさんも、みんなそれを胸につけなければ外を歩けなかったんですよ。

それから、これも本に書きましたけど、三十代ぐらいのひよろひよろとした女性と知り合いになりましたね。貧しそうな人で——パリにも昔の建物のてっぺんの屋根裏みたいなところに貧しい人が住んでいたんですけど——、そういう屋根裏に住んで、子供もある人でね。ある時、「洋服を縫ってるんだけど、あなたのも明日縫って差し上げてよ」と言われましてねえ。私、たまたま布きれを持っていたのだったか、何かを修理してもらったか、日本から持って来ていたのが大きすぎたんだか小さすぎたんだかね、その辺はもう覚えていませんけど、その家に行きましたらね、ドアにちゃんと「ユダヤ人」ってね——想像できますか——もうペタッと紙が貼り付けてあるのね。そして、しばらくして、その門番か誰か、事情を知ってる人が私を探しに来て、私のところまできて、「あの人はユダヤ人だもんだから、今朝早く、ドイツ兵が来てね、家族全部連れていきましたよ」って言うんです。こうしてユダヤ人はアウシュヴィッツですか、あそこへみんな連れて行かれて、焼かれてね。私は映画で見たんですけど、『夜と霧』だったかしら、女性の真っ黒な立派な髪の毛だけを集めて、またどこかに売って

いるとか、身につけてた貴金属をみな奪い上げて売る人がいるとか……。私の時代にも、そういうことがパリで行われて、フランスで行われていたんですよ。ですから、オギャーって生まれたときにユダヤ人ってことは大変なことだ、ということを感じましたよ。

菅野——ありがとうございました。この話は、語り始めると、それだけでもうひとつ別の座談会を開かなければならなくなる話でもありますし、シモーヌ・ヴェイユについても、また後ほどお尋ねすることにしたいと思います。かたや、大崎さんが『パリ、戦時下の風景』にお書きになっている数々のエピソードのなかで、特に私にとって印象深かったのはヴィルドラックの詩にまつわるエピソードでした。その詩を読む前に、大崎さんから少し説明していただけませんか。

大崎——それは昭和17年、1942年6月のことでした。ベルリンから昭和通商という会社の松田さんがパリの陸軍武官事務所に現れました。この会社は、日本の財閥系の数社が一つになって戦略物資を確保する目的で設立されたものでした。たとえばドイツへ満州大豆を送り、その見返りに、化学製品や技術的な資料や図面を受け取っていたらしいのです。ドイツでは大豆から化学繊維を作っていると噂に聞いたことがあります。フランス人が笑い物にした **haricots verts**（インゲン豆＝色の連想からドイツ軍人の軍服を指す）も原料は満州大豆だったのでしょね。

松田さんのパリ訪問の目的は、二種類の商品の買い付けでした。日本は南方で戦争をしていて、マラリヤ病で死んでいく人がたくさんいるけれども、薬がない。また、戦傷者が出てラジウムがないからレントゲン写真が撮れない。ぜひ協力してくれと、私は買い付けをまかされました。マラリア病の薬の方は、世界的な製薬会社ローヌプーランで容易に入手できました。目が飛び出るほど高い薬でしたよ。

次はラジウムの針です。これがおもしろいんですよ。会社のベテラン社員の息子さんと、敗戦で除隊になって家に戻っていた元軍医がいました。彼の調査で次のようなことがわかったのです。二年前のドイツ軍進攻の際の **Exode**（大量避難）の時、パリから退走した人たちのなかでは、老人や病人で田舎に居着いた者が非常に多い。それから、当時のパリでは、生活が苦しいので、少々のことでは誰も病院の厄介になろうとしない。したがって、病院は開店休業の有様で、ラジウムの針が余ってるんですよ。こうなると、医者は不要なラジウム針などの売り食いで忍んでいくしかないのです。キュリー研究所では、販売を希望している医者

たちの針の番号を登録して、販売の労をとっているということでした。しかし、フランス人の感情として、ラジウムの針をドイツには売りにたくない。強制的に買い取られる時には、べら棒に値をつり上げる。ところが、この際、買い手が本当に日本なら話は別で、特別に安く売ってもいいというのですよ。そこで、日本人の証拠として、私の出番でした。どこで探したのか、職人に非常に肉厚のずっしりと重い鉛の箱を作ってもらいました。ラジウムの放射線におかされないためですね。私はその箱を持って、松田さんから渡された札束を鞆に詰めて、キュリー研究所へ出かけていったものです。

松田さんは、私の説明も聞かず、一方的に、ほんと買い付け代金を精算してくれました。おやおやと私が呆気にとられている間の早業でしたね。彼はドイツ軍が払っているラジウム針の値段を知っていたのです。しかし、それが法外な値段とは知らなかった。だから、私の利益は人に言えないほど莫大でしたよ。1944年8月、ドイツ軍のフランス撤退にともなって、私がベルリンへの脱出を決意し、パリ支店を閉鎖するにあたって、長年苦楽を共にしてくれたフランス人とイギリス人の古株の社員たちに、手厚く退職金を出してあげられたのは、ひとえにあの時の利益のおかげだったのかと、あらためて六十年前の事件の機微に触れる思いです。

吉村昭さんの『深海の使者』という小説がありますね。戦時中、1942年から次々とドイツへ派遣された七隻の潜水艦の物語です。最初の伊号三十は四か月かけて、インド洋経由、ケープタウン廻りで目的港、ブルターニュのロリアン軍港に着きました（このドイツ潜水艦の根拠地に、私は前年の1941年、視察に訪れた山下奉文中将を案内したことがありました）。さて、数か月前に買ったマラリアの薬とラジウムの針は、この潜水艦で日本へ運ばれることになっていた。ところが、あとで聞いたところによると、七隻のうち日本に帰ったのはたしか二隻のみで、あとは英国の爆撃を受けて全部沈んでしまった。

それはともかく、ある夜、陸軍補佐官の桜井中佐が、そのベルリンから来た昭和通商の松田さんと私をパリのの真ん中のサン＝トノレ市場近くのキャバレーに招待してくれました。ドアを開けた瞬間、固いドイツ語の異様な響きに耳を打たれました。ドイツの将校連の蛮声のなか、踊り子たちが踊っている。けばけばしいショーが続く。ところが、突然水を打ったような静けさのなか、一人の女性が毅然とした態度で舞台に立ちましてね。コメディール・フランセーズあたりの女優

ではなかったでしょうか。それは美しいフランス語の、悲壮なまでに格調の高い響きが、部屋の空気を震わせはじめました。それが、このヴィルドラックの詩、しかも反戦的な、ヒューマニズムの詩の朗読だったのです。第一次大戦の頃、反戦運動が起きた。バルビュス、ロマン・ロラン、そしてこのシャルル・ヴィルドラックといった詩人や文学者が反戦運動を起こしたのでしたね。そのヴィルドラックの詩をコメディール・フランセーズの女優とおぼしき女性が、その日、舞台上で朗読したんです。朗読が終わっても、割れるような喝采がいつまでも続いていますよ。ドイツの軍人たちは、詩の意味もわからず、熱狂的な拍手を送っているのです。それがおかしくて、おかしくて。これこそはフランスのレジスタンスなんです。反戦、つまりはドイツに対する抵抗の詩にドイツ人が一所懸命になって拍手を送る。それを見て、フランス人の方では「なんだ、この程度か」というような顔して愉快がる。それが当時のパリの風景のひとつだったんです。

菅野——それでは、シッシェ先生に原文を読んでいただいて、その後、大崎さんに、『パリ、戦時下の風景』にも収録されているご自身の訳を読み上げていただくことにしましょう。

SI L'ON GARDAIT...

Charles Vildrac

もしも とっておいたら

シャルル・ヴィルドラック (大崎正二訳)

Si l'on gardait, depuis des temps, des temps,
 Si l'on gardait, souples et odorants,
 Tous les cheveux des femmes qui sont mortes,
 Tous les cheveux blonds, tous les cheveux blancs,
 Crinières de nuit, toisons de safran,
 Et les cheveux couleur de feuilles mortes,
 Si on les gardait depuis bien longtemps,
 Noués bout à bout pour tisser les voiles

もしも とっておいたら
 そのむかし むかしから
 柔らかく かぐわしい
 死んでいった女たちの
 髪という髪の毛を
 すべての金髪
 すべての白髪
 夜の黒さの長髪
 サフランいろの房髪
 そして 枯葉いろの髪の毛を

Qui vont sur la mer,

Il y aurait tant et tant sur la mer,
 Tant de cheveux roux, tant de cheveux clairs,
 Et tant de cheveux de nuit sans étoiles,
 Luisant au soleil, bombant sous le vent,
 Que les oiseaux gris qui vont sur la mer,
 Que ces grands oiseaux sentiraient souvent

Se poser sur eux,

Les baisers partis de tous ces cheveux,
 Baisers qu'on sema sur tous ces cheveux,
 Et puis en allés parmi le grand vent...

Si l'on gardait, depuis des temps, des temps,
 Si l'on gardait, souples et odorants,

Tous les cheveux des femmes qui sont mortes,
 Tous les cheveux blonds, tous les cheveux
 blancs,

Crinières de nuit, toisons de safran,
 Et les cheveux couleur de feuilles mortes,

Si l'on gardait depuis bien longtemps,
 Noués bout à bout pour tordre des cordes,

Afin d'attacher

A de gros anneaux tous les prisonniers
 Et qu'on leur permit de se promener

Au bout de leur corde,

Les liens des cheveux seraient longs, si longs,
 Qu'en les déroulant du seuil des prisons,
 Tous les prisonniers, tous les prisonniers

Pourraient s'en aller

Jusqu'à leur maison...

もしも とっておいたら
 遠い遠いむかしから
 はじとはじとを結びつけ
 海をゆく帆を編むために——
 海の上には たくさん たくさん
 たくさんの赤髪
 たくさんの淡い金髪
 そして 星のない夜の黒髪

絹のような帆がたくさん
 太陽にかがやき 風にくらみ
 海にとぶ灰いろの鳥は
 あの大きな鳥たちは
 これらすべての髪の毛から消えていった接吻
 これらすべての髪の毛にそそがれ
 強い風のなかに消え去った接吻を
 しばしば わが身の上を感じるだろう

もしも とっておいたら
 そのむかし むかしから
 柔らかく かぐわしい
 死んでいった女たちの
 髪という髪の毛を
 すべての金髪
 すべての白髪
 夜の黒さの長髪
 サフランいろの房髪
 そして 枯葉いろの髪の毛を

もしも とっておいたら
 遠い遠いむかしから
 はじとはじとを結びつけ
 太い繩を編むために——
 あの大きな輪に
 ありとあらゆる捕虜たちを結びつけ
 繩をたよりに歩くがままにまかせてやったら
 髪の毛の繩は長い長いことだろう
 収容所の門から長い繩をくりだして
 ありとあらゆる捕虜たちは
 ありとあらゆる捕虜たちは
 自分の家まで
 辿りつくことができるだろう

菅野——ありがとうございます。大崎さん、この詩について何かつけ加えることがおありでしたら。

大崎——フランス人は、この戦争をつうじて非常に知的なレジスタンスを国民をあげてやっていましたよ。レジスタンスというのは、武器を取っての戦闘的なものから、この詩の朗読のように静かな知的なもので、いろんな形があったわけですよ。これとはカテゴリーはまったく別ですが、大きく世相を反映したものに、軽妙な *petites histoires*（小話）がありました。戦時中を通して、作者不明のこの種の楽しい創作は随分と流行ったものでしたよ。たとえば、私がそうした小話の新作を一つマルセイユで仕入れて、「よし、うまい話を仕入れたぞ」と土産がわりにパリへ持ち帰る。すると、もうパリでは皆が知ってるんです。フランス国中、噂話が伝わるのが早くて早くて、マルセイユから急行列車よりも先にパリに着くのですから驚きました。どうやってあれをやるのか、今でも不思議ですね。

菅野——今日は、一つだけ、その手の小話をご披露願えますか。

大崎——では一つ、参りますか。パリのセーヌ川に沿って有名な古本屋通りがあります。ある日、お巡りさんが通りかかると、とある店先にダルラン提督の写真が立てかけてあって、「Vendu」と書かれたカードがそばに置いてある。「おいおい、怪しからんぞ。それは何だね」「いや、書いてありますとおり、売約済みでして……」。「Vendu」とは「売れた」、つまり「売約済」という意味ですが、同時に「売国奴」、つまり敵に身を売ったという意味にもとれるんですね。それでお巡りさんは、「今度ここを通る時まで、そのカードを取り払っておけ！」と命じて立ち去った。それでいて、彼もフランスのお巡りさんですから、「あいつ、なかなかやるな」と内心楽しいわけです。

数日後、お巡りがまた店先を通りかかる。すると今度はペタン元帥の写真が飾ってあって、カードに“Épuiisé”と記されてあります。「おい、こら、これは何だ」「いえ、この写真はこの一枚限りで、あとは品切れでして……」。ところが“Épuiisé”は「品切れ」のほかに、「疲れ切った」「老いぼれ」という意味もあります。お巡りは、ふたたび「怪しからんじゃないか。カードを捨てておけ」と言い残して去りました。数日後、またそこを通ってみると、ダルランとペタンの二枚の写真のあいだに、驚くなかれ、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』

（『憐れなる人々』）の豪華本が置いてあるではありませんか……。おわかり？のちにダルランはフランス艦隊を率いて、トゥーロン軍港からアフリカのダカールへ脱出しましたが、1942年にアルジェで暗殺されました。

菅野——ありがとうございます。

大崎——そういう小話がたくさんあったんです。ドイツにはドイツで結構あったようですよ。それによって、戦争からちょっと遠ざかろうとする心理があったのでしょね。

菅野——ふたたび片岡さんにお話をうかがいたいと思うのですが。片岡さんは、ドイツ占領と言ってもドイツ軍などまったく入って来ない、ラジオも新聞もない、おそらくは近隣の村人も片岡さんがそこにいるということさえ知らなかったかもしれない、そういう場所で占領期の後半二年間を過ごされることになったわけですね。

片岡——ブルー（Blou）のこと？

菅野——はい、そのお話を聞かせていただけますか。

片岡——それでは、皆さん、ちょっとばかり地理を思い浮かべて下さいね。フランスがありますね。で、パリが北のほうにありまして、そして、セヌ川がずっとイギリスの方に向かうのかな。それからロワール河が、こっちの左の方、西の方に流れているでしょ。その流域にアンジェという大きな町があるんですけど、教会もありましてね。そのアンジェっていうところまではパリから特急か何かがありますけれど、そこから先、バスに乗り換えてだいぶ行ったところに小さな村があって、一つのシャトーがありました。今はどうなっていますやら、わかりませんが。その地所の所有者の世代が変わって、若い人々にはそんな地所、必要ないし、もう田舎に住んでもいないでしょ。そういう場合、みんな国の手に渡っちゃうんですね。そういうシャトーをマドレーヌ・ダヴィーという方が借りて、そこに女子学生を集めてカトリック系のシスターたちをつけ、勉強させながら夏を過ごさせる、という活動をなさっていたんですね。私も、戦争中の夏休みの過ごし方の一つとして、それに参加したんですね。それに私は、偶然といいますか、夏休みをそこで過ごすことになって、そしてそこで出会ったシスターの影響で徐々にカトリックに興味を持ち出したっていう具合になっていくんですけども。それで、学校の勉強のためには外務省からずっと学費をもらってましたけど、

住むのはそのシャトーでした。そのシャトーに一室借りて、お掃除の手伝いとかなんとかしながら静かに勉強ができたんです。それがロワール河畔のアンジェから離れた、小さな村っていうのかしら、その村の丘の上に建っているシャトーに戦争が終わるまで置いてもらえたんです。だから、あんまり世間のいざごは知りませんでした。のちにアメリカ兵が入ってきたっていう評判を聞いたのは、本にもちょっと書いたと思いますけど……。この話は、ちょっと先に行き過ぎですか？

菅野——いえいえ、どうぞ。

片岡——よろしいですか？ 私が置いてもらったブルーという村には、水がないために、ドイツ兵も来なければアメリカ兵も入って来ない。水がないと大勢で生活できませんからね。そのおかげで、とっても平和に暮らすことができたわけです。そのブルーで、私が歯医者さんにかかった時でしたかしらね。たしか女の方から聞いたと思いますので、その歯医者さんが女性の方だったのか、あるいは歯医者さんのところに来ていた女の人だったのか、とにかくアンジェから伝わってくる噂話として、こういうことを聞きました。つまり、その当時のごく普通のフランス人にとっては、アメリカ人っていうのは想像もつかなかった存在だったのね。「アメリカ人っていうのは大したもんだ」「そうですよ、われわれフランス人が想像もできないことをやってのけているようですよ」なんて話しているのね。ドイツ軍を追い出すためにフランスの北の方から入って来ましてね、北の何とかいう村からどことかまで長いパイプを引いて、そうして水を流したんだか、電話の回線を通したのか、とにかく「フランス人の想像もできないようなすごいことをアメリカ人はやっているようですよ」って、人々がびっくりして話していたのを印象深く覚えております。

菅野——片岡さんは『人間この複雑なもの』の中に、ブルーに滞在した二年の歲月について、こうお書きになっています。

それからパリ解放直後までに流れた歲月！ この世であるか、死後にであるか、それとも前世にであるか、とにかくパラダイスというものが存在するとしたなら、私はパラダイスに生きた、ということが出来る。

そして、それは僅か二年という時間としては短い歳月に過ぎなかったが、しかしそれは時間を超越した境であったから、私はまた、パラダイスで永遠を味わったと

いうことが出来よう。（163頁）

この感慨には今も変わりありませんか。

片岡——そうですね。想像してみてくださいよ。小さな村になっているわけですが、それでそのシャトーなるものがありますよ。それが、わりとモダンでね。同じシャトーでも中世的なのはうんと古いですけど、そのシャトーはね、鉄の立派な門がありまして、門のところすぐには建物はないんです。シャトーの建物は奥にあって、この入口の門のところからシャトーまでのあいだに大きな楕円形の芝生があるんです。私たちは食べるのに、その広い芝生をジャガイモ畑にしちゃうんですよ。現在はジャガイモの畑なんかとはとんと縁がなくなってしまいましたから、一体どんなにしてジャガイモを作っていたのか、もうわかりませんが、種を蒔いたらジャガイモが生えてきたんでしょかね。とにかく、ちっぽけな草のようなものが生えていましたよ。私は力がないから、「あなたはジャガイモの虫をとるのを仕事にしなさい」って言われてね。お天気の良い日には、私は畑にしゃがんでね。ジャガイモにどんな虫がついていたか憶えていませんけど、紙の袋かなんかに、しゃがんでは入れていたように思います。そんな風にして、無事に暮らせたね。食べ物といっても田舎のことですからね……。あ、それからウサギね。その芝生のある大きな庭の隅っこには、ウサギ小屋もあったんです。そして、ウサギに食べ物をやるのが私のお仕事になりました。何をやってたのか忘れてしまいましたけど、可愛いウサギがいてね。それでウサギは、あの頃でしたら復活祭とかクリスマスとか、そういう時のご馳走として食べていたようです。ニワトリなんていったら、きっと大変なことになっていたんじゃないかしら。

菅野——ジャガイモの虫をとって、可愛いウサギに餌をおやりになっていた、その二年間、修養会では新聞にもラジオにもお触れにならなかった。

片岡——ラジオねえ。ラジオなんてなかったんじゃないかしら。

菅野——シスターの方々、あるいは一緒に勉強された方々のあいだで、政治とか、占領というものについての言及は一切なしですか？

片岡——さてねえ。新聞なんてなかったのか、見なかったですよ。

菅野——ありがとうございます。さて、片岡さんがでブルーで静謐そのもの

の生活を送っていた時期、かたや大崎さんの方は現実と泥まみれになってパリで過ごしていらっしやっただけ。この『パリ、戦時下の風景』を読んだだけでも、ここで話したいエピソードというのはまだ数え切れないほどあるのですが、時間の制約もごさいますので、一つだけ、占領期後半のエピソードとして靴屋さんの話をぜひお願いしたいと思うのですが。

大崎——1944年5月頃のことでした。その後、英米軍のノルマンディー上陸が6月。ルクレール将軍に続いてド・ゴール将軍のパリ入城が8月。ですから、パリ解放の三か月前の話です。

パリ十六区に、以前は「アンリ・エヌ街」と呼ばれていた静かな通りがありました。これはハインリヒ・ハイネのフランス語読みですね。これがユダヤ人の名前だからという理由でドイツ司令部に嫌われて、ある時、ついに「セバステイアン・バッハ街」という町名に変わりました。ドイツ軍による占領が始まってから二、三年後ですよ。しばらくしてから、ようやく気づいて通りの名前を変える、ということがあったんです。

その通りに、一軒の小さな *cordonnier*、つまり靴の修理屋がありました。フランスというのは靴の修理が昔から大変上手な国でして、とにかく底の減った靴をきれいに直すんですよ。その一家はアングジャールとあって、パリで多く見かけるペイザン（田舎人）タイプで、十六歳になるちょっと知恵遅れの娘がいました。私がこの夫婦と知り合いになったのは、近くに住む日置鉄三郎という、松方コレクションを忠実に保管していた人の紹介によるものでした。

ある日、その店に頼んであった修理の靴を取りに立ち寄ると、いつものフランス人の軽口が聞かれません。それどころか夫婦が目赤く泣きはらしているんです。「おい、どうした」と尋ねても、ものが言えない。ただ、「*Monsieur Osaki, regardez*」（オオサキさん、見てください）と、一枚の葉書を渡されました。それはオテル・マジェスティックのドイツ司令部から出たもので、「某月某日午前某時に *Gard du Nord*（北駅）に出頭せよ」という通達でした。奴さん、何も悪いことした覚えはないんですよ。敗戦の色がますます濃くなっていたその頃、司令部はこの非人道的な命令をやたらにばらまいているという街の噂を私も耳にしていました。通達が届くと、否応なしに、三、四日後には北駅から牛馬用の貨車に乗せられてドイツへ送られる。徴用されるんです。それはかわいそうで

したよ。私もある時、北駅の近くで見たことがあります、あの貨車の中におそらく五十人は乗せられるのでしょうか、それが何台も連なっているのですからね。貨車には小窓が一つついているだけ。排便はどうするのか。ドイツでは軍需工場に送られるのか。あるいは、ドイツ兵の軍服を着せられてソ連の戦線に立たされるのか。ひょっとするとドイツの軍服を着せられてフランスの戦線に送られる、などということも……、いや、そんな恐ろしいことはなかったでしょうが。

私は、わがことのように目先が真っ暗になって、気を揉むばかりでした。なんとかしてこの家族を救いたいと思った。しかし、彼らは日本人ではない。まさか日本大使館にフランス人の問題を持ち込むわけにはいかない。どうしたものか、困った、困った、と思いつつながら会社へ戻る途中で、突然「しめた！」と私は叫びました。ビュローに戻ると、私はタイプライターに向かってキーを叩きました。「ドイツ最高司令部御中」という書き出しで、「左記の者は、某月某日付徴用命令……号を正に受け取りました。実はこの者は、二十年このかた、パリ在住の全日本人の靴の修理を一手に引き受けている靴屋です。もしもこの者が徴用されるならば、すべての日本人がいかに嘆くことでしょう。この誠実な男をなんとか救いたいというのがわれわれの切なる願いであります。どうか高配を願いたい。」つまり、「これを断ったら承知しないぞ」というような手紙ですね。それを持って、私は司令部に出かけました。ヒューマニズムがナチズムに負けてたまるかと、私は闘志満々でした。

一時間ねばって、ついに私は命令書の葉書に「取消」のスタンプを押させました。考えてみますと、これは私の文学に根ざすヒューマニズムの勝利だったんですね。その上、この時たしかに私のフランス語が役立ったと思うのです。相手のドイツの大尉殿は、文化国フランスに来て、フランス語コンプレックスを持っていた。一般に占領側のドイツ人には文化的な弱みがあった。なんとといっても、「シェイクスピアはドイツ人である。英国人だなんて言ったら承知しない」というような教育を受けているのですからね。その当時、私はフランス語がまだうまかったから、そうなるドイツ人はフランス語に対して非常に弱いんです。教養のある人でないとフランス語を喋らない。極端に言うと、ドイツでも、オーストリア、ハンガリーでも、昔は貴族がフランス語の教育を受ける。しかし、中尉か大尉ぐらいでは、よほど立派な家柄でもない限りフランス語の教育を受けないか

ら、こうなると私のフランス語のほうは何枚か上だったんです。

とにかく、私はその手紙を見せると、ドイツ人将校の方からフランス語を喋り出した。最初に彼の弱気なフランス語を耳にした瞬間、「これはいける」と思いました。話しているうちに、向こうの態度がだんだん変わってくる。こちらの勝ちを確信しましたね。続けて強引にフランス語で押しまくっているうちに、相手が折れた。そこで「取消」のスタンプを押してもらい、それをもって靴屋にとって返したのです。

「取消」の印が押された葉書を渡してやると、靴屋の方では……、ご想像がつかましよう。言葉が胸につかえて、顔を涙でぬらして、私を呆然と眺めて立ちつくしていた夫婦の姿を、私は忘れることができません。

それから三か月後、私は、ドイツの退却部隊の波にもまれつつ国境を越えて、ベルリン支店に辿り着いたのでした。当時、私の会社は陸海軍と大きな商売をしていたわけで、その会社のパリの駐在員がフランスに留まるなどということは、当時の日本の思想ではとても理解できないことです。即、謀反人として、日本人の資格と信用を抹殺されることになりましたから。そのようなことになったら、日本の本社の活動にも差し障りがあるでしょう。そこで、各社一斉にパリを離れ、ドイツに移ったわけですよ。仕方なしにです。日本人である、ということの証明みたいなものですね。商社としては三井、三菱、大倉の三社。ほかに伴野商店と御木本商店。銀行は横浜正金銀行と日仏銀行の二行。これが民間企業の全部ですが、全員がフランスから脱出したのです。

戦後二十年経って、私はふたたびヨーロッパで働くことになりました。まずはロンドンに駐在して、ある日パリを訪れました。すると、パリの街がきれいになっていて、白く輝いているんですよ。戦時中というと、オペラの近くでまたドイツ人が殺られた、などという世の中でした。パリの目抜き通りでドイツの兵隊が殺されるんですからね。そんなことをあちこちで見ているから、思い出が暗くてね。ところが、戦後、ド・ゴールの一声で、パリの建物は外壁を洗って、ノートル・ダム寺院もルーヴル博物館もみんな洗ったので、眩しいほど明るい。それほどまで変わって見えました。

昔の街の思い出と新しい街が頭の中がばらばらで、かつてパリジャン気取りだった自分が、いま旅行鞆を手にしてエトランジェとして歩いている。この違和感

がなんとも始末が悪いのですね。ふと靴屋の Ангジャールのことを思い出し、まだ靴屋をやっているかなと思って、私はパッシーからモザール通りへ出ました。すると、二十年前とまったく同じ店があるではないですか。しかし、代が変わっているかもしれない。ちょうど昼の時間で、店が閉まっているので、近くのビストロで軽く食事をしてから、時間を見計らって店に戻ってみました。すると、その大きなガラス窓のなかに、いるじゃないですか、親爺が。フランスの *cordonnier* というのは青い大きな木綿のエプロンをしているのですが、そのごわごわのエプロンを首から足先までかけて、下を向いて靴底に鉄やすりをかけている。頭の形で、すぐに彼だとわかりました。そこで、私はコツコツとガラス窓を叩きました。靴屋は頭を上げると、悲鳴をあげましたよ。死んだはずの男が、にゅっと目の前に現れたのだから当然ですよ。日本ですとこういう時、すぐに足があるかどうか確かめるのですが、フランス人がどうしたか、私は見なかったのです。そうっとドアを開けてくれた彼は、まだおかしな顔をしている。「*Vous vous rappelez?*」（憶えている？）と言うと、「*Oui, monsieur Osaki.*」それでも、まだぼんやりしている。「おいおい、俺だよ」と言ってやりました。すると、親爺は部屋の奥へ一目散に走り出して、螺旋階段の下をのぞいて叫びました。「*Monsieur Osaki est là. Viens vite...!*」（オオサキさんだぞ、急いで上がって来い！）すると小太りの細君がね、こんな風に頭を振り腰を振って現れました。彼女もまた私の顔を見て、びっくり……。

やがて私たちは小机をはさんで、コニャックのグラスを手にしました。「娘さんはどうした、ネネットは」——ネネットというのはアントワネットの愛称で、あのマリー・アントワネットのアントワネットと同じです——「ネネットはどうした」と訊くと、「娘は結婚して二人の子供の母親で、郊外で幸せに暮らしています。」「命さえあれば、こうしていつかは会える。会えてよかったね。」しばらく沈黙が続いていました。すると細君の目がうるんで、やがて堰を切ったように両の頬に涙が流れていました。「あの時のことを思い出したのか」「そうなのですよ。わたしたち親子と孫が、いまこうして幸福な日々を送れるのは、みんなあなたのお陰ですもの。」主人のルイも泣いていました。「私たちは長いあいだ、あなたの安否を案じていましたが、いつの頃からか、激戦地だったベルリンですもの、てっきりあなたは亡くなったものと思うようになっていました。」私は、いずれ

また会いましょう、その時は娘のアントワネットにもぜひ会いたい、と言って店を出ました。

この話は、日本に帰ってからも、昔の侍従長の三谷閣下——フランス大使をなさった三谷隆信さんですね——や、それから朝日新聞の渡辺紳一郎さん、フランス大使の井川克一さんにも語って聞かせました。それからロンドンでは、非常に難しい商売の時に、ある英国人がいまして——これがとてつもなく恐ろしい御仁で、日本の連中はそばに近寄るのも怖がっていたジョン・ブルでしたが——、彼をパーティーに呼んだ時に、この話をしましたよ。しかも、これを私は英語でやったんです。この中学生並の英語の力で。すると、その恐ろしい英国人が、「イエス、サー！」といてすっかり私を崇めている。これにはびっくりしました。あの戦争時代にそういう人道的なことをやった日本人がいたのか、ということで、向こうはすっかり感動してしまったわけですね。それもいくらか手伝ったのか、パイプラインのパイプ三万トンというオーダーをスムーズに遂行しましたよ。相手は本社がロンドンにある「イラニアン・オイル」、イランの石油会社でした。三万トンの注文ですよ。私は、その後も英国人を家に呼んで、すき焼きをご馳走したりしながら、殿様みたいに崇められていた時期がありました。

菅野——どうもありがとうございます。たっぷり取ったつもりの時間も残り少なくなっただけで、まだまだうかがいたいことはたくさんあるのですが、そろそろ解放の時期に話を進めて、それぞれ、お話いただきたいと思います。先ほど、片岡さんがお話になりかけたところで、私が「それは後回しに」と言った話がありました。解放直前の悲しい話ということでしたが……。

片岡——パリ解放ですね。パリ解放の時、私はパリにおりました。そして、街の中ではね、大体は若者だと思えますけど、みんな喜んで大騒ぎしてるなかでも——それが解放ですからね——、市街戦があったんですね。まだパリに残っているドイツ人などがいたんでしょう。それをピストルで撃ったりなんかして、まあ追い出そうとしてるのね。私も本当は外に出てみたんですけど、ちょっとそういうわけにもいかないような話も耳にしていたのです。本にも書きましたけど、私は、先のダヴィ女史という方が作っているグループの一人として、ある建物の一室に置いてもらっていたんですね。そこのお台所をやってる中年の女の方が、確かチェコ・スロヴァキアの人だったと記憶していますけれど、一人で台

所で泣いているんです。しくしく、しくしくと、テーブルに肘を掛けてね。私は外に行きたいんだけど、そのおばさんが泣いてるもんですから、側にいてあげたんです。どうして泣いているの、と聞くと、その人の息子さんがフランス人の若者にまじって市街戦に出て、そして、ついさっき殺されちゃった、ピストルにやられて死んでしまった、というんです。夫はもう亡くなっていたか、あるいは別れたか知らないけれど、とにかく、せっかく自分が一生懸命働いて育てた息子が、このパリの市街戦で、たった今、ドイツ人に殺されたっていうんで、とっても泣いて悲しんでいましたのでね。私は、そのおばさんにつきっきりで慰めていました。だから、パリ市内の様子はよくわかりませんでしたけれど、あとで外に出て見てみますと、方々の家の入口のところに貼り紙が出ていましてね。市街戦の最中、ここで誰々が亡くなったっていう貼り紙が、何日間か、家々の軒先に出ておりましたですよ。そういう市街戦、悲しい市街戦の後でやっと、パリは本格的に解放されるんですね。解放直前の悲しい話でしたけど、そういうことがありました。

菅野——大崎さんは、パリ解放の時、すでに在仏の日本人たちといっしょにベルリンに向けて移動中と考えてよろしいですね。

大崎——そうです。

菅野——その先、ベルリン、マルスドルフ城での生活については、「占領期のフランス」というテーマから出てしまいますので、皆さんに『彷徨月刊』に連載された「マルスドルフ城の日々」「雑木林のなかで」を読んでいただくことにして、ここからは会場からの質問を受けつけたいと思うのですが、よろしいですか。

大崎——はい。

菅野——いかがでしょう、会場の皆さん。

会場から——先頃、97年にフランスに行った時に、ちょうどド・ゴールの記念行事のようなものがありまして、コンコルド広場に大きなラジオを備え付けて、そこでド・ゴールの演説が繰り返し流されていたりしたんですけれども、あのド・ゴールの最初の演説、「自由フランス」の放送を大崎さんはお聞きになりましたか。なんでもフランス人から聞いた話ですと、演説の時には必ずベートーベンの第五交響曲の出だし、あのダダダダーンという「運命」の音が必ず響いたん

だそうですが、その通りなんでしょうか。その話をしてくれたのは若いフランス人でしたから、本人が聞いたはずはないわけで、そのことを大崎さんにおうかがいしてみたかったのですが。

大崎——それはド・ゴールがロンドンに行つてすぐ、フランス向けに放送した演説のことですか？

会場から——そうです。あのレジスタンスを呼びかける主旨の……。

大崎——私は、その時、ボルドーにいたのですけれどね。避難先ですし、そういうラジオの設備もなかったので、実際には聞いていません。本の上では知ってますけど。

会場から——今日、お二人がお話くださった時代について、私も本で読んだことしかないので、そのことについて質問させていただきます。もしかしたら、今から名前をあげる二人の方をご存じかもしれないので、その方たちのドイツ占領下のフランスにおける活動——活動というよりも、お仕事というべきでしょうか——について、どういうふうにお考えになっていらっしゃるか、お答えいただけるとありがたいです。一人は、彫刻家、まあ彫刻家にはなりませんでしたが、彫刻をなさってらした方で、高田博厚さん。戦後、ドイツに行かれて、罪を問われてですね、それからパリに戻られた方です。その方について、一言で答えるのは難しいかもしれませんが、大崎さんはどういう風にお感じなのでしょう、という点が一つ。それから、片岡さんには、私は全然詳しくないので、同じ時期に留学された方で原子物理をなさっていた……。

大崎——は、は、は。

会場から——湯浅年子さん。

大崎——湯浅さんね。

会場から——私どもの世代、湯浅年子さんの回想記『『ら・みぜーる・ど・りゅくす——パリ随想』1973年』は、特に理科系に進む女性の方にとっては一種のバイブルのようなものでありました。その方と片岡さん、なにか接点がありましたのでしょうか。その二点です。

大崎——それはね、ちょっとデリケートな話だ。困りましたな。想像していただけますか。

菅野——高田博厚については、どうでしょう。

大崎——高田博厚については、こういうことです。彼は東京外語でイタリー語をやり、私の十年ぐらい先輩ですが、二年生の時に岩波書店から『ミケランジェロの生涯』とかを翻訳しまして——二年生の時にですよ——、それで印税が入ると、さっさと中退して、イタリーにダヌンツィオか何かの勉強に行ったとか。その後、パリで、今度は彫刻をはじめ、マイヨールの門下だったそうです。

彼は戦時中に日本語のガリ版の新聞を出していました。日刊か週刊か、覚えていませんが、かなり評判がよく、パリの日本人たちの役に立っていましたよ。先刻、博厚さんが戦後ドイツに行って罪を問われて云々、とのご質問がありましたが、そんなことがあったとは思われません。

彼は私と同じ頃、パリを脱出してベルリンに来ていたのですね。ドイツが降服した時、毎日新聞のベルリン支局長の大島鎌吉さんに相談に行っただけです。「自分はもう日本に帰りたくない。またフランスに戻りたいが、いいですかね」と。そして大島さんから、「君はパリの現地採用で、毎日新聞の本社員ではないから勝手にして構わないよ。ただし、日本との通信が再開したら、アヴァス通信を通しての一番にニュースを送ってくれ」と言われて別れたそうです。ちなみに、この大島さんという人は、ロサンジェルス・オリンピックの三段跳びの銅メダリストなんですよ。

その当時、ドイツにいたフランス人は、自由の身となって帰国するのに、鉄道の復旧を待ち切れず、徒歩で帰ったものですよ。シャツを破って染めたりして作った三色旗をなびかせ、乳母車に荷物を乗っけて、五人、六人とグループになって、国境をめざして歩いたんです。博厚さんは、そんなグループに、「僕は日本人だけど、本当はフランス人なんだ」と、とぼけたことを言って入れてもらい、ベルギー国境に辿り着いたが、そこで捕まってcamp de concentration（収容所）に入れられて、のちにパリに戻ったのだそうです。それからまたパリに十年余、そして1958年に二十七年ぶりに母国の土を踏んだのです。

四年後に日本橋の高島屋で彼の彫刻展が開かれたので、私も行って見ました。「元気でなによりだ」「大倉、あるのか」「あるよ」「それはよかったね」と、まるで毎日会っているみたいな口振りで、それで会話は終わりでした。その後何年かして亡くなりましたね。その展覧会で見た彼の彫刻はともかくとして、木炭のデ

ッサンの美しい線の流れが印象に残っています。

私の非常に親しい友人に、彫刻ではおそらく日本一だったでしょう、清水多嘉示という人がいます。彼も1920年頃、フランスで彫刻を習った。彼はマイヨールではなく、ブルデルの弟子でしたね。その清水多嘉示に、「高田博厚の作品はどうですか」と聞いたことがあります。しかし、あれほどの大家になると同業者の評価というのはそう軽々しく言わないものでしてね。「うーん、あれねえ」と言って、結局返事をしませんでした。

会場から——これは日本人の問題であって、フランスの問題ではないんですけども、当時、フランスと日本というのはある種の敵対関係にあったわけですね。それで大崎さんはドイツに行かれた。ドイツは同盟国だからドイツに行く、フランスにはいられないからドイツに行く、という、そういう事情もおありだったと思います。片岡先生もそうですが、その頃、日本とフランスとの国交関係から言いますと、日本人にとってフランスは公的には交戦国でもあるという、そういう感じもおありになって、それが日本人の滞在にとって何らかの影響を及ぼしたのではないのでしょうか。その辺の事はいかがなんでしょう。

大崎——日本とフランスは交戦国ではありません。日本とドイツは同盟国。ドイツとフランスは戦争をしている。しかし日本とフランスは戦争してませんよね。だから日本人は非常に自由でしたよ。どこへ行くのも自由。そして食券ももらっていたし、何も差別待遇は受けなかったですよ。

会場から——日本人ピアニストで、当時、ロベール・カサドジュの弟子としてやはりフランスにいらした方で今西さんの場合……。

大崎——誰？ 今西？ 今西博子さん、ええ、知っていますが、口をきいたこともない関係です [今西博子『巴里より愛するママへ』1941年、実業之日本社(1971年、薔薇十字社より復刻)]。

会場から——ご存じですか。その今西さんの場合も、ドイツ軍が入ってきた時に先生が亡命してしまい、これからはどうなるかわからないというので、やはりドイツに行った。戦時期をドイツで過ごし、終戦後、シベリア鉄道で帰ってくる。そのあたり、大崎先生のご経験と共通しているかもしれない。シベリア鉄道で帰ってくる途中、ソ連と日本の関係が敵対関係になって、これまで友人だったのが敵国の人間になるのだ、と汽車のなかで宣言されたというようなことがあった。

大崎——今西さんは、私と同じ時期に満州まで帰って来ていたようですが、それから後の消息はわかりませんね。

それから、淡徳三郎という人がいました。京都の三高時代からの社会主義者で、雑誌の『改造』などで論陣を張っていた人物です。軍部に睨まれてパリへ脱出した過去があったのです。

彼と新京でばったり会った時、私は「あんたもパリからベルリン、そして日本か」と言いましたが、彼は別のことを考えていたのですよ。今、日本に帰れば陸軍に睨まれて、召集されて戦場に送られるだろうと、洞が峠をきめこんでいたのですね。終戦から三年経った頃、ひょっこり私を銀座の会社に訪ねてきました。あの時、ソ連軍が侵入してきて捕らえられて、コーカサスに送られ、荷役に使われていたというのです。人間の運不運はわからないものです。でも元気そうで、根が醇朴な彼に私は親しみを感じていました。

会場から——私は博士課程の学生で、今、シモーヌ・ヴェイユについて勉強しています。ユダヤ問題について関心があるので、今日、片岡先生にお会いできるのを本当に楽しみにしていました。片岡先生のご著書の中に、ヴェイユ一家がマルセイユからアメリカに渡った船の中でのエピソードが引用されています。船には九百人のユダヤ人が乗っていて、椅子は十八脚しかないのに、ヴェイユの両親は、彼女がゆっくりとものを書くことができるようにと、毎日、一脚の椅子を必死で確保していたというエピソード、その八年後に片岡先生がヴェイユの両親に会って直に聞いたというエピソードを読ませていただいたのですが、そのほかのことでも結構ですので、シモーヌ・ヴェイユの両親にお会いになった時、印象に残ったお話など聞かせていただけたらと思います。

菅野——少し補足いたしますと、片岡さんの『シモーヌ・ヴェイユ——真理への献身』に、マルセイユを発ったヴェイユ一家が、カサブランカのアイン・セバ難民収容所で十七日間アメリカ行きの船を待たねばならなかった時のことが書かれてあります。停泊していた船の中でしょうか、その船底にはユダヤ人の難民が……。

片岡——ええ、大勢ごったがえしていましたね。

菅野——何百人と。それに対して船には椅子が十八脚しかなかった。「難民九

百名に対し十八脚しかなかった椅子の一つを彼女がずっと独占していたこと。このエピソードはシモーヌ・ヴェイユが片時も惜しんでペンを走らせる姿を描きだすものとして伝えられたのであろうし、事実、彼女について執筆する人たちもそのような見方に立っている」(185頁)というふうに、片岡さんが非常に具体的にお書きになっておられるので……。

片岡——あ、そうですか。

菅野——これが非常に視覚的なイメージなんです。

なるほどこの十七日間に彼女はペラン神父宛の長文の手紙を書いたり、「前キリスト教的直観」中の「神の降臨」を完了したりなどした。ただもう考えが次から次へと押しよせる状態にあったことは解る。殊に一旦アメリカに上陸した暁は目まぐるしい行動の日夜が待っているはずだったから、この安定した日々のうちに是非とも思ったことであろう。がそれにしても、この九百名がユダヤ人でなかったら彼女は十八脚の一つを独占していただろうか?……集団を憎む彼女の周りを九百名という一集団が取り囲んでいる。それがほとんどユダヤ人たちだ! この九百名は黙々としていたわけではないであろう。泣く、わめく、しゃべる、騒々しい集団であったことだろう。が、その中には老人、幼児、病人が大勢まじっていたに相違ない。これらの人びとの不幸が彼女の心に訴える何もものもたなかったのだろうか?……彼女は彼らに一顧をだに与えず——いや、与えることを欲しなかったかもしれない——ただただペンを走らせる。傍らで、病身なこの娘の体を気づかい、周りの人びとに気がねしておずおずと弁解しながら一脚の椅子を毎日確保している彼女の両親。八年後にパリのヴェイユ家でわたしに娘のことを語った小柄で物静かなあの二人!(185~186頁)

この非常に具体的なカサブランカでの船の中の様子というのは、ヴェイユの両親が片岡さんに直接語った内容だったのですか?

片岡——私がお両親にお会いしたのは、ずっと後ですね。後というか……。

菅野——その時のことを話していただけますか。

片岡——会いに行った時の話って、そうですね、何と言ったらよいか、目には浮かんでくるのですが……。また、さっきのように、そうね、向こうにセヌ川が流れているとしますね。それで、こっちの方にこう行くとリュクサンブール公園ってというのがまずあります。それで、そのリュクサンブール公園がどこで終わったとしますか、ここで終わったとしましょうね。細長くなっていますから、リ

リュクスンプル公園は。ここにブルヴァール・サン＝ミシェルっていう通りがずっとあって、ちょうどリュクスンプル公園がここでおしまいというところで、こちらに来るとモンパルナスになりますけれど、ちょうど公園がおしまいになっているところで、リュクスンプル公園の方に二階の窓が向いているといったらよいかしら、こちらの左に入りますと。そういう建物の何階、何階かな、忘れちゃったけど。そこにヴェイユのご両親は住んでいらした。

どうしてそれを知ったかという、そのリュクスンプル公園がちょうど終わって、ブルヴァール・サン＝ミシエルのこのあたりに、「ル・プティ・フランス」という本屋ができて——これは本に書いたかしら、ちょうどあのころサン＝テグジュペリの *Le Petit Prince* っていう本が……、お読みになった方あるでしょ、『星の王子さま』っていうの。お読みになった方、ちょっと手を挙げてみて。たくさんいらっしゃるでしょ（挙手多数）。あの本が出た時なんです。それで、その若い女の人が書店のご主人なのですけど、「ル・プティ・フランス」という名前をつけたのね。それで私は「おや、こんなところに本屋さんができたわ」といって喜んでそこへ行ったら、店の女主人が——たしか、私がシモヌ・ヴェイユの本を頼んだのかしら——、「あなたね、シモヌ・ヴェイユに興味があるならば、彼女のご両親がこのリュクスンプル公園のすぐ近くの小さな細い通りに住んでいらっしゃるから、会いに行ったら」と言うので、私のことですから早速会いに行ったわけです。何か、とっても簡単に会って下さいましたよ。

菅野——その時、ヴェイユの両親は、この船の中のことを何かおっしゃっていましたか？

片岡——さあ、どうかしらね。昔のことで忘れちゃいましたわ。

菅野——それでは、のちほど懇親会の時にでも、さきほど質問した博士課程の彼女に個人的にお話してあげてください。

休憩をとるのもすっかり忘れて、ここまで一気に来てしまいました。十分とったつもりの時間もすでになくなりかけておりますので、まとめに入りたいと思います。今日、この場には、もちろん教師もいますが、大半はこれからフランス語とフランス文学・思想を勉強しようと思っている学生たちです。あるいは大崎さんのように、実社会の第一線でばりばりの商社マンとして活躍する人間が、ひょ

っとしたらこのなかにいるのかもしれない。その学生の皆さんに対して、それぞれ一言ずつ、励ましのお言葉を頂けたらと思います。では、片岡さんから。

片岡——ええ、励ましの言葉ね。私はこれしかありません。好きな詩の朗読でもいい、とおっしゃってくださったので、エリュアールの「ポルトレ」という題の詩を読み上げたいと思います。なぜこれを引っぱり出したかということ、私が皆さんに申し上げたいことが、まさにこの詩の一番終わりのところにあるからなんです。

PORTRAIT

Paul Eluard

Par douze douceurs j'avouerai ta grâce
Celle de manger d'abord et de boire
Celle de rêver ensuite à ton sort
Désordre toujours menant au beau temps

Sourire prend forme au fond de ta chair
Comme un appel d'air au fond d'une mine
Et tes souvenirs sont caresses blanches
Et tu te souris et tu te caresses

Tu es ton enfant tu joues à la mère
Et tu te reprends à jouer l'amour
Tu te songes seule et te revois double
Dans un seul miroir deux bouches en une

Beauté ma bonté austère et puérile
Lumière et chaleur voyante et visible
Qui te veut aimer naît dans la rosée
La terre s'accroît dans le lait du ciel

Tu dresses tes seins vers le cœur des autres
Ta poitrine claire est sans un nuage
Tu es sans orgueil sans humilité
Et la vérité sort de ton corps nu

Douzième douceur ta vérité vit
 Et m'apprend à vivre engendrant l'espoir
 Tu es très patiente et nous irons loin
 L'espoir est un bœuf labourant un champ

Et c'est un flambeau labourant la vue.

ポール・エリュアール『一人の地平線から万人の地平線へ』（*De l'horizon d'un seul à l'horizon de tous*）（1948年6月『ウーロッパ』誌掲載）に初出

片岡——l'espoir（希望）、これですよ。「Tu es très patiente」（君はとても辛抱強い）とあるから相手は女性みたいね。「L'espoir est un bœuf labourant un champ」ここ面白いわね、希望というのが牛にしてあって、それが畑を耕すとなっているのよ。「Et c'est un flambeau labourant la vue」（そしてそれは視界を切り開く松明である）——la vue というのは視界のことでしょ。だから、皆さんに申し上げたいのは l'espoir ということですね。絶対に「l'espoir なんか俺にはもうない」とか「私は駄目」とか言わないでください。もう絶対に l'espoir っていうのを……、何て言ったらよいか。私がここから見える光といたら、あの非常口のグリーンの電気でしょ。だから l'espoir っていうのは、みなさんから見ればこちら側ね、光を放っているもの。そのように l'espoir を見ながら生きていってくださいと申し上げたいですよ。変なことを言っちゃうけど、私は、数え年でいえば九十五歳ですか。でしょ、だから年齢がいくつであろうと関係なく、l'espoir っていうのは、何て言うのかしら、自分の前の方に見ながらね、一生懸命生きて行くっていうのかしら。それが大事なことだと思いますよ。

菅野——片岡さんは、マルセイユとパリで、あの「小さくて暗い青の裸電球」をご覧になったからこそ、それとは反対の、この詩にあるような大きな lumière（光）、flambeau（松明）、vue（視界）もご覧になれる、などと私がまとめてしまっただけであまりに僭越でしょうか。ありがとうございました。

では、大崎さん。私が最初に大崎さんのお宅にお邪魔してお話をうかがった時、一番印象的だったのは、文学と商売との関係というもので、私は目から鱗が落ちるような思いがいたしました。今、この都立大学は——こんな話をこの場でする

のも憚られるのですが——、「大学改革」と称して、いかにも近視眼的な実利先行の空気が蔓延しております。何かこう、「実」にもっとも縁遠いものであるかのようにして一番狙われているのが文学なんです。そんな折、「文学もろくに知らない連中に、たいした商売も事業もできっこありませんよ。僕が、あんな時代にバリでなんとかやって来られたのも、文学をやっていたからです」という大崎さんの話をうかがって、それをそのまま活字にして都庁にぶつけてやりたいとさえ思った次第です。

大崎——悠長なものは不必要だというのは、粗悪な人間の思想で話になりませんね。短期速成では名酒は生まれません。熟成には歳月がかかるのです。

とにかく文学というものはえらいものですよ。文学で人間を作ってください。いろんな本を読んで下さい。そして **intuition** (直感) の技術を身につけてください。ところが、世の中には似て非なるものがたくさんあります。すぐに結論を出してはいけません。すぐに結論を出すのは、頭がよさそうに見えて、格好もよろしいが、実は頭がよくない証拠なのです。選択肢が乏しいからスピードがあるのは当然なのです。

ものを判断する時には、遠いところに目をやって、人の話に三分の一ぐらいしか耳を貸さない。自分の世界をもって、大きな広がりの中で、耳に囁くようになってくる程度のもを聞いていればよいのです。広い視野を持つということは、宇宙観の中で、おのれ一個を孤立させ、四方八方から自己点検をする作業です。これは文学の力です。

現在の日本を思うと悲しくなりますね。寄ってたかって悪いことをする。それがばれそうになると、寄ってたかって証拠隠滅をする。自己確立を怠った社会は、まことに憐れです。工業生産方式で人間を速成して来た日本は悲しむべきです。

自分を大切にしましょう。自分の一生を、そして他人の一生を大切にしましょう。こつこつと勉強して、多くの書物の中から多くの人生を学ぼうではありませんか。人間というのは高々1メートル50とか1メートル80でしょう。この地球の上にそれだけで、二本足で立っている。人生、昔は五十年と言ったものですが、今は、かりに八十年としましょう。そのあいだに何ができますか。何もできはしない。人の知恵を借りて、本からいろいろなものを吸収して、自分をだんだん太らして行く。そして、勇気ができて、自信をつけて……。

そして、お願いしたいのは、美に対する感動を一生枯らさないください、ということですね。若々しい感動をはぐくんでください。これは人間の特権ですよ。それが一番えらいことだと思う。ものに感動すること。草花を見て、鳥の飛ぶのを見て、海や山を見て、動物たちを見て、人の心の美しさを見て、大いに感動しようではありませんか。それは人間が生きている証拠なのですから。どうぞよろしく。(会場拍手)

菅野——今日は、予定されていた休憩時間も忘れて、あっという間に三時間が過ぎてしまいました。長い時間、ありがとうございました。お越しくくださったお二人に、もう一度拍手をお願いいたします。

音声・録音係	岑村傑、岡健司、川原雄太
会場・写真係	高橋博美、浜口美代子、志村未帆
アンケート作成	渡辺敦子
資料	中曽根慶
テープ起こし協力者	岡健司 柿並良佑 門郁代 川原雄太 志村未帆 高山浩 高橋博美 樋口峰子 増川千春 宮部幸徳

※ご協力いただいた、西田書店、日仏学院メディアテック、国際交流会館の方々に篤くお礼申し上げます。



座談会終了後の懇親会

略年譜

	時代の動き	片岡美智さん	大崎正二さん
		1907 (明治 40) 年 1 月 6 日 福井市に生まれる 1928 (昭和 3) 年 東京女子大学哲学科卒業	1913 (大正 2) 年 福岡県に生まれる 1935 年 東京外国語大学フランス語部卒業、大倉商事入社 大倉商事パリ支店に着任
1937			
1938	9 月 ミュンヘン協定 11 月 人民戦線崩壊		
1939	8 月 独ソ不可侵条約 9 月 独軍、ポーランド侵攻	法政大学文学部仏文学科卒業 初めて女子に応募が許可されたフランス政府招聘留学生試験に合格 12 月 22 日 ジャン・ラ・ボルド号で神戸港を出国	4 月 重爆撃機の図面と軍艦大和の機関砲を日本へ
1940	(「奇妙な戦争」) 5 月 独軍、西部攻勢開始 6 月 14 日 パリ陥落、同 16 日 ベタン内閣成立 9 月 ユダヤ人身分規定 1 月 ベルクソン葬儀	1 月末 マルセイユ着、パリへ リュクサンブール公園近くの女子寮に住む 音声学院修了 (独軍のパリ侵略のため、終業証書は与えられないまま)	6 月 現地社員らとボルドーに避難 10 月 邦人社員が日本に引き揚げるなか、一人パリにとどまる 松方コレクションを日置氏と共に死守 (現在東京の西洋美術館所蔵)
1941	6 月 独ソ戦開始 12 月 「夜と霧」政令 / 日本軍、真珠湾攻撃 (12.8)	パリ大学所属海外仏語教師養成校卒業 パリ大学文学部でフランス言語学を学ぶ	3 月 山下泰文中将のクルニツ社訪問、ブルターニュ潜水艦基地視察に同行 7 月 ヴィシー政府に日本製缶詰の独占輸入を交渉 (日本軍の仏印進駐により航路が絶たれ、実現せず)
1942	5 月 占領地区のユダヤ人にバッチ着用義務化 7 月 ヴェル・デイヴ事件 (ユダヤ人一斉検挙)	同級のユダヤ系女子学生がある日突然着用し始めた「ユダヤ人章」に強い衝撃を受ける (彼女らはほどなく消息を絶つ) 夏 ダヴィー女史主宰の夏期修養会に参加 秋以降、同修養会の研究生らとともにロワール河畔のモールバニル、ブルニで学究生活を送る	6 月 ラジウム針の買付け ヴィルドラックの詩
1943	1 月 「民兵団」結成 2 月 強制労働徴用 (STO) はじまる 9 月 イタリア降伏		
1944	6 月 ノルマンディー上陸作戦 8 月 パリ解放	解放の報をうけてパリへ、そこからブリー地方のラ・フォルテルへ	12 月 グルノーブルで河合亨氏に会う 5 月 フランス人靴屋家族を苦境から救う 8 月 パリ日本人会会長をつとめる (副会長は早川雪洲) 在仏邦人らとともにベルリンへ
1945	5 月 7 日 ドイツ降伏 8 月 15 日 日本降伏	パリ 13 区、リュクサンブール公園近くの一室に落ち着く 47 年夏「ヴェズレーのロマン・ロランの家でロラン夫人の母キュヴィリエ夫人と過ごす 49 年、カミュ、50 年、ジードに会う 50 年 6 月 パリ大学において文学国家博士号を取得 (主論文「スタンダールにおけるエゴチスム」、副論文「ゲーテとスタンダール」) 52 年 帰国、南山大学教授に任ぜられる 以後、法政大学、京都外国語大学、東京日仏学院などで教鞭を執る (91 年、京都外国語大学名誉教授)	3 月 ベルリン南西のマールストルフ城で籠城生活 6 月 シベリア、満州經由帰国 46 年 銀座、大倉商事本社に復帰 50~51 年 東京外国語大学でフランス語講師 65~67 年 大倉商事ロンドン支店長 69~70 年 パリ支店長 71 年 退職

文 献

片岡美智

著書

- ・『女の一生』（共著）、誠文堂新光社、1952年
- ・『人間 この複雑なもの』文芸春秋新社、1955年
- ・『私もまた？ 悩める妻へ』、大日本雄弁会講談社、1956年（附：「静かに息を絶たれるもの」（ロジェ・ヴァン・エック著、片岡美智訳）
- ・『世界女性解放史』（共著）——フランス篇（片岡美智） イギリス篇（坂西志保） アメリカ篇（石垣綾子） ドイツ篇（田中寿美子） 北欧諸国篇（坂西志保） ロシア篇（石垣綾子） 中国篇（西清子） 東南アジア篇（田中寿美子）——、中央公論社、1957年
- ・『スタンダールの人間像』、白水社、1957年
- ・『シモヌ・ヴェイユ——真理への献身——』、講談社、1972年

編訳書

- ・アンドレ・ジード『自作を語る』、目黒書店、1951年
- ・ロマン・ロラン全集 第64巻『ゲテとベートーヴェン』、みすず書房、1952年
- ・ロジェ・ヴァン・エック『青い目の日本のぞ記』、朝日新聞社、1955年
- ・ジャン・コクトー『わが生活と詩』、ダヴィッド社、1955年
- ・サルトル『嘔吐』（教科書版）、第三書房、1974年
- ・ロマン・ロラン全集 第23巻『ベートーヴェン偉大な創造の時期 1』（共訳）、みすず書房、1980年
- ・エリュアール『生命の時代』（美術出版社）

大崎正二

著書・雑誌掲載記事

- ・「フランス四年間の文學（ドイツ占領治下の素描）」、『世界知識』第一巻第四号、1946年5月1日
- ・『パリ、戦時下の風景』、西田書店、1993年
- ・特集 大崎正二「大崎正二さんインタビュー」「マールスドルフ城の日々」、『衍書月刊』第307号、1998年4月（以後、同誌に、「雑木林のなかで」と題し、「ヒトラーは自殺していた」1～5、「バイオリンの音色」、「大井廣介の不思議」1～2、「日本茶、海を渡る」1～4、「フランス軍購買団」1～6、「「こけし屋」のタベ（ソワレ）」1～2を連載）

※現在続編を執筆中——「回想の森」（「チュウリッヒまで」「アンゴラ兎毛と寒天」「作並さんのお手柄」「猫の生涯」「三人の明治人」「さようなら、アームスさん」「食用蛙のたわごと）」、「一枚の写真」「佐谷のカイエ」「フランス革命（コンシエルジュリにまつわる事件）」、「瓜ふたつの島」「ガン病棟の一か月」

「恋文横町」

訳書

- ・ モーパッサン『運命の女』、大地書房、1948年
- ・ スタンダール『赤と黒』、山根書店、1950年
- ・ プロスペル・メリメ『タマンゴ』、白水社、1951年
- ・ プロスペル・メリメ『賭博』、白水社、1952年
- ・ クーデンホーフ・カレルギ『思想は世界を結ぶ——クーデンホーフ・カレルギ自叙伝』(上・下)、実業之日本社、1953-1954年
- ・ モーパッサン『短篇集』、創人社、1955年
- ・ ピエール・ビノー『スエズ運河物語』、実業之日本社、1957年
- ・ ジョルジュ＝マルセル・ユイスマン『フランス革命物語』、実業之日本社、1957年
- ・ エーブ・キュリー『キュリー夫人伝』、実業之日本社、1957年（これをもとに1966年2月、NHKで連続ラジオ放送）



アンケート結果

担当 渡辺敦子

- ★ 歴史の生きた証言をききながら、しばし自分をタイムスリップさせていました。本で読む機会があっても実際の話は、より迫力のあるものでした。専門分野も違い日頃なかなか触れることのできない世界ですが、貴重な一時を過ぎて頂きました。靴屋さんを助けて再会できた話は感動的でした。（都立大教員）
- ★ とてもよかった。Frédéric Mitterandの深夜のトーク番組のようでした。（中央大学教員）
- ★ モノクロ写真にわずかながら色が付いたような気がします。昔のお話もとても興味深く聞かせていただきましたが、やはり、学生としては、最後のお二人の言葉、「希望」と「人の話は三分の程度、自分の世界をもつこと……」という言葉が印象的でした。（他学学生）
- ★ 素晴らしかったです。お二人の著作、読んでみたいと思います。（都立大関係者）
- ★ 実際に経験された方から直接お話を伺えるという、めったにない機会に恵まれてよかったです。私から見れば大事件のように思えるような体験を、お二人が淡々と語られていたのが印象的だった。（学外の方）
- ★ 予想をはるかに上回る愉快なお話に感服しました。（都立大関係者）
- ★ 写真が見られなくて残念でしたが、それ以外は満足のゆく内容でした。もっと広く告知するべきだと思います。（都立大卒業生）
- ★ 月並みですが、歴史の生きたお話、本当に貴重なお話をきけた。もっと大きなメディア（テレビなど）で、たくさんの日本人に聞かせたいと思いながら。最後に、お二人の年齢に気づいて驚いた。（学外の方）
- ★ 授業で聞いていたこと事を直に聞くことができ、さらに理解が深まり、大変になりました。（都立大生）
- ★ 研究上の関心から占領下のパリに関心があったが、実際に経験された方の話をきけるというのは、文字資料に欠けている「実感」を伝えてくれて興味深かった。（学外の方）
- ★ 勇気の産物のような企画に感動しています。片岡さん、大崎さんの言葉に、とても確かな説得力を感じました。（学外の方）
- ★ 大変参考になりました。尊敬できる方々が年長にいらっしやることは、とてもうれしいことです。（都立大関係者）
- ★ 大変興味深く拝聴しました。できたら、またこのような機会を作っていただきたいと思います。ありがとうございました。（学外の方）
- ★ お二方の明晰さに感動しました。御健康を心からお祈り致します。（都立大関係者）
- ★ 片岡氏の「ダビデの星」の話には、昔見た「ミスター・クライン」という映画を彷彿させられた。しかし、実体験された人の話は、映画よりも生々しい印象を残しま

す。大崎氏のパリ脱出の話からは、日本における空襲のあと火災を逃れて田舎へ歩いていった日々を思い出す。今日の企画に感謝します。(上智大学教員)



座談会終了後の懇親会